
ただそれだけの話

タムラカエデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただそれだけの話

【Nコード】

N0108V

【作者名】

タムラカエデ

【あらすじ】

それはありふれた日常。

そして崩れゆく日常。

それは剣と魔法が織成す幻想の世界。
そして魔族に脅かされる幻想の世界。

訪れるのは、望まれた召喚と望まなかった召喚。

これはそんな物語。

ありふれた日常から異世界へと召喚される 　　ただそれだけの話。

prologue (前書き)

ただそれだけの話修正・再構成についてのお詫び。

どうもこんにちは、タムラカエデです。ご愛読して頂いてる皆さんには申し訳ないのですが、このたび私目の勝手な都合で本編を修正、再構成させて頂きました。

内容はちよっとした修正だったり、丸々再構成だったりともう本当に申し訳ありません。

今後はこのようなことが無いようによく練り、よく考え筆を進めて生きたいと思しますので、どうかこれからも末永くよろしくお願ひいたします。

手前勝手ですが、ご理解、ご容赦いただけたら幸いです。

早速丸々変わっております。

プロローグ以降、修正を行いしだい、順次更新していきます。

prologue

夢を見ていた。

それはもう、自分でも夢だと解かってしまう位の夢。

夢の中で俺は、家族で食卓を囲み、友人たちとくだらない話で笑いあい、無様に命乞いをする親の仇の、苦痛と恐怖で醜悪に歪んだ顔をナイフで滅多刺しにして……。

そんな、まるで夢のような夢を

そんな、夢を見た。

「先輩、先輩！先輩！！」

いつそ鼓膜をぶち破ってしまいたい程の大音量で、泣き叫ぶような声が耳に入ってくる。

御陰様で夢から引き摺り下ろされた俺は、軽く動かせる程度の体の自由を得た。

だがしかし、自由に動ける現実リアルより束縛された夢の方が良いに決まっている。時と場合にもよるが、今回は間違いなく後者だ。

まあつまるところ、俺はまだ起きたくない訳で。
可愛らしい声の主には悪いが、また夢の中に入り込

「先輩！お願いだから目を覚まして！！先輩……お願いだよ……
ひっく。」

ませてはくれないようだ。

クソツタレ、泣くか叫ぶかどっちかにしてくれ　出来れば黙っ
てくれ。ついでに体を揺さぶるのも止めてくれ。

えらく庇護欲をそえられるような声を出したって無駄だ。フェミニ
ニスト精神っていうのはそれなりの服を着て始めて発揮されるって
知ってたか？

そして残念な事に俺は今パジャマだ。なら、言わなくったって分
かるだろ？

寝間着のフェミニニストがいるって信じてるなら、御愁傷様。神様
を信じる方がまだマシだ。

ベッドの上じゃあ野郎はどいつもこいつも獣なんだ。送りは狼、
ベッドじゃライオン。クソツタレな世の中だ。

そういう訳で、理解したんなら他所を当たってくれ。理解してな
いんなら、俺じゃなくて隣の部屋の馬鹿を叩き起こして食われちま
え尻軽女。

「うう……えぐ、ひっく。せんばあい………」

ああ、チクシヨウ。

頼むよ、何時に無く良い夢を見たんだ。最高に素晴らしい、いつ
ちまいそんな位の夢を見たんだよ。

だいたい部屋には鍵を掛けて置いた筈だ。どうやって入ってきたんだ、警察呼ぶぞ。

とか何とか思いつつ、無視して布団を被り直そうとしたが……どうにも布団の感触が無い。

もしかして掛け布団は引っぺがされたのだろうか。おいおい、勘弁してくれ。もう10月も終わりかけだっていうのに毛布一つも無いなんて凍死してしまう。

よくよく考えてみれば、背中 of 感触もいつもと違って硬く冷たい。ベッドから引き摺り下ろされた可能性もある。

冷たいといえば、肌に触れる空気もそうだ。確か窓はちゃんと閉めたはずなんだが。

どうせ体を揺さぶってくるこの女のせいだろう。きつとそうだ。そうに違いない。

クソツタレ、見てろよ、今は無きアルカトラズの囚人たちも裸足で逃げ出すぐらいのどぎついお灸を据えてやる。

「
」

薄っすらと目を開ける。

薄暗くて、あまり周りが見えない。チクシヨウ、まだ夜じゃないか。いい度胸だ、この糞女クソアマしばき倒して肥溜めにぶち込んでやる

「……先輩？先輩！気が付いたんですか先輩！！」

薄っすらと開けただけなのに、もう女に気付かれた。

声が聞こえた次の瞬間には、涙で顔をくしゃくしゃにした女の子の顔がドアップで目に映る。

見慣れた黒いツインテールの女の子。親友の大切な妹。自分にとっても妹のような大事な後輩。

……ああ、何をやってるんだ俺は。

先程まで心の内に抱いていた罵詈雑言が裸足で逃げ出す。顔に落ちる彼女の涙のおかげで、冷や水をぶっ掛けられたかのように夢見心地だったおめでたい頭が覚醒する。

とにもかくにも、まずは泣いている彼女を安心させないと

「

「先輩？まだ体動かしちゃ駄目です！せんぱ

」

大丈夫だと、そう伝えられるくらいには笑うことが出来たのだろうか。

体を起こそうとする俺を必死に彼女が止めようとしたが、そういう訳にもいかないだろう。

どれだけ寝ていたのか、体の節々が痛い。そのせいで、起き上がろうにも体をうまく動かすことが出来ない。

無理やり体を捻り動かしながら、首を回して周囲を見る。うまい具合に後ろに瓦礫があったので、何とか体をずり動かしながら、瓦礫に凭れ掛かるようにして上体を起こした。

「

自然と、一仕事終わったような息が口から漏れる。

……なんてザマだ。上半身一つ起こすだけでも、芋虫みたいに動いて大きな溜息が出る程の重労働。

大丈夫だと醜く笑ってみたのはいいものの、目の前でじっと見ていた後輩にこうも心配そうな顔をされては先輩も形無しだ。

今なお、心配そうに俺の顔色を窺う少女。目を真っ赤に泣き腫らし、顔も涙で濡らし。いつもの可愛らしい笑顔は見る影も無い……
ああ、まったく。酷い顔だ。

……俺のせい、だろう。それ以外に思い浮かばない。

どれだけ寝ていて、どれだけ泣かせたのだろうか。

今更ながらに、安心させようとして彼女の頭に右手を伸ばす。

「
」

伸ばした筈の腕は、彼女に届かなかった。

不思議に思っただ腕に視線をやると、肘より少し上から手の中指に至るまでの部分が丸々無くなっていた。彼女がしてくれたのだろうか、喪失部には包帯代わりの布が巻かれている。

思い出したかのように、ズキリと鈍い痛みが腕を襲う。が、不思議と腕を無くしたにしては大した事が無い痛みだった。包帯代わりの布は真っ赤に染まっているが、血はもう流れていない。止まったのだろうか……止まるもののだろうか。今はどうでもいい事のように思えた。

「……あ、先輩、その、腕、腕なんですけど……」

俺の視線に気付いたのか、少女が説明しようとしてしどろもどろに口を開く。

せつかく泣き止んだと思ったのに、また目元に涙を浮かべて、次第に嗚咽交じりになって。

それに、澄んだような可愛らしい普段の彼女の綺麗な声は、ずっと泣いていたためなのか擦れていた。

ズキリ、と腕が痛む。

チクシヨウ、また泣かれては堪らない。泣いて欲しくない。

気にするなよ、腕一つぶっ飛んだところでどうって事無い。いやどうって事あるけど、今は本当にどうでもいい。

チラリと左腕に視線をやる。有難い事に、どうやらこっちは健在らしい。軽く力を入れてみたが、問題なく動く。OK。

そしてそのまま左腕を伸ばして、目の前で泣きそうな彼女の背中に腕を回し、体を無理やり自分の方へ引っ張り込むようにして抱きしめた。

驚くほど簡単に、彼女はすっぽりと腕の中に納まった。突然のことに驚いたのか、言葉を無くした彼女はどうしていいのかわからず此方を見る。

ああ、それでいい。泣かないのなら、なんでもいい。

それにしても、よかった。本当に、ああ、本当に

「無事で、良かった。」

「あ。」

結局、彼女を泣かせてしまった。

胸の中で、糸が切れたように咽び泣く少女。安心させてあげるのは出来たのだろうか。まあ、気の済むまで放って置こう。

ズキリ、と腕が痛む。

それよりも、いい加減状況を整理しなければいけない。

何が、一体、どうなっているのか。

情けない話、どういうわけか記憶がすっぱりと抜け落ちている。

意識こそはつきりしているものの、正直まだ夢の中にいるような感じが否めない。矛盾している。

痛みはある。確かに今俺はここに居るというのに、どこか地に足が着かないというか、現実味が無いというか。まあ、目が覚めてみれば右腕がぶつ飛んでるわ、服を汚した後輩はわんわん泣いているわで、理解できないのも当たり前だが、そういう訳にもいかないだろう。

腕の中で泣いている彼女に聞くのが一番手っ取り早いけど、今はどうにも気が進まない。

ズキリ、と腕が痛む。

落ち着かせるように少女の背中をさすりながら、周囲の様子を見る。

目が慣れたからなのか、はたまた最初からそうだったのか。少し遠くまでなら見渡せるくらいには明るかった。が、正直真っ暗な方がマシだった。ああ、チクシヨウ。

瓦礫、瓦礫、瓦礫、瓦礫、瓦礫、とにかく瓦礫が目映った。

大きいものから小さなものまで何でも取り揃えてございますとも言いたげな、元が何だったのか分かる筈も無い建築業者涙目の瓦

礫の百貨店。

割れたり陥没したりと散々な道路の上には、転倒したり、潰れたり、燃えたりという元車。電柱や標識も倒れたりへし折れたりして散らかっていたりと、無事なものを見つける方が難しい惨状。

あわや崩壊を免れた建物も、ガラスが割れてるだけならまだいい方で、何階層かから上が倒れてたり、ガスの爆発か何かで燃えていたりと酷い有様だ。

ズキリ、と腕が痛む。

ああ、神よ ジーザス・ガツテム・ファツキンベイバー。チクシヨウが
くたばりやがれ

危つく口ずさんでしまいそうな罰当たりな言葉が思い浮かんだ。誰でもこんな状況に放り出されたら文句の一つでも言いたくなる。

まあ、カミサマは懐が深いから黙って便器に流してくれる事を切に願いたいところだが　そのところどうなんですかと、この状況に現実逃避したくなって空を見上げる。

……そしてすぐに後悔した。クソツタレ、足にコンクリの固まり縛り付けて肥溜めにぶち込んでやる。

何の冗談か、見上げた空には月が二つあった。

雲も星も無い、吸い込まれそうな虚空で禍々しく光る紅と蒼の月。頭がクラリとした。

ズキリ、と腕が痛む。

……どういう事だ。月のウサギは無邪気に餅ついて黄な粉で食べるおめでたい奴らじゃなかったのか。

一体何時からトマティーナ派と海水浴派に分裂してやがる。いいご身分だな、誰に断って趣味を変えたんだチクシヨウ。

くだらない。

あおいつきのうさぎたち。みんなでたのしくかいすいよく。つかれてもどこにもあがれない。みんなおぼれてしんじやった。つきはかなしくてないている。

あかいつきのうさぎたち。みんなでたのしくとまとまつり。つぶれたとまとはうさぎたち。みんなつぶれてしんじやった。つきはおこつてないている。

本当に、くだらない。

月を見ている内に頭がおかしくなったのか、碌でもないことを考えてしまった。

ズキリ、と腕が痛む。

軽く頭を振って、視線を落とす。

少女はしゃくりあげたような泣き声をたまに出す程度までには落ち着いたようだ。

だが状況は依然として変わらない。街は散々。月は二つ。さて、どうしたものか。

ズキリ、と腕が痛む。

そもそも此処は何処なのか。何故後輩がここに居るのか。なぜ彼女と二人きりなのか。アイツはどうしたのか。

ズキリ、と腕が痛む。

俺は家で寝ていた？違う、彼女の服も俺の服も私服。そう、出か

ガツン、と何かに殴られたような気分だった。
激しい腕の痛みとともに、抜けていた記憶が甦る。

「先輩！？やっぱり腕」

「椎名ちゃん。」

苦痛に顔を歪めてしまった俺に驚いて彼女が声を掛けてくるが、
彼女の名を呼ぶことでそれを遮る。

ああ、認めよう。逃げていた。知るのが怖かった。でも何よりも
始めに聞かなければいけない事だった。

「椎名ちゃん 正義は何処だ。」

尋ねたのは、一緒に居た筈の幼馴染の安否。大切な親友。彼女の
兄の所在。

それは、突然の出来事だった。

事を終え、俺と椎名ちゃんと正義は街を歩いていた。特に目指す
場所も無く、ただ歩いているだけだった。

すると、正義が突然何か聞こえると言い出し、足を止めた。不審
に思っていると、俺にも、椎名ちゃんにも、街を歩いていた人にも、
歌うような声が聞こえてきた。

それを皮切りにしたように、地面が揺れ始め、それに気をとられ
ているうちに次第に揺れは大きくなっていった。

どこか安全な所に逃げようとした時には、遅かった。正義の足元
に円形の幾何学的な発光した模様が浮かび上がり、正義がその魔法
陣に似た円から外に出ることが出来なかった。

収まるどころかますます大きくなる揺れ。逃げ惑う人々の叫び声。ガラスの割れる音。鳴り響く車のクラクション。爆発音。

刻一刻と酷くなる状況の中で、パニックになり半泣きの椎名ちゃん、どうにかして正義を引きずり出そうとする俺に、アイツは逃げろと諦めたような笑いを浮かべた。

そんなアイツにどうしようもなくムカついて、悪足掻きするようにアイツの腕を掴んで、アイツも俺の腕を掴んで。何とか腕だけでも円の外に引き出して、そのまま体も引っ張り出そうとして。いつの間にか周りは夜になったかのように暗くて。魔法陣が眩しい位に発光して。アイツは椎名ちゃんを任せるなんてふざけた事抜かして。

激しい痛みが腕を襲うのと同時に光が全てを包み込み、一瞬浮遊したかのような感覚の後 視界は暗転した。

「椎名ちゃん、正義は何処に居るんだ。」

俯いて答えない椎名ちゃんにもう一度聞く。
ふざけるな。何で答えないんだ。近くに居たんだからすぐ答えられる筈だろ。

「答える！椎名！！」

いい加減鬱陶しい腕の痛みと苛立ちが相俟って、つい声を荒げてしまう。

肩をびくりと震わせた椎名ちゃんに少しばかり罪悪感に責められたが、すぐに消えていった。

「……………知らないです。」

「嘘だ。」

躊躇いがちに出された言葉をすぐに否定する。

そんな筈無い。あるものか。俺はアイツの腕を掴んだ。アイツも俺の腕も掴んだ。なら近くに居る筈だ。

「気が付いたら、先輩が倒れてて、先輩の腕が無くて、血がいつぱい出てて……。服を破って手に巻いたけどすぐには血が止まらなくて、うっ、先輩は全然起きなくて、怖くて、でもお兄ちゃんも全然来なくて、ひっく。」

「……もういい、もうたくさんだ。」

次第に涙声になっていく椎名ちゃん。また泣かれてはたまったものじゃないので、彼女を押し退けて立ち上がる。

片腕が無いせいでよろけるが、どうでもよかった。押し退けられた椎名ちゃんが短い悲鳴を上げるが、それもまたどうでもよかった。

「先輩？何処行くんですか先輩!？」

五月蠅い、黙れ。

怯えたように声を掛けてくる椎名ちゃんを無視して歩き出す。

探す、探す、探す

あの馬鹿が居ないなんてあるものか。泣いている妹をほっぽり出して何処が行くなんてあるものか。

どうせ近くでアホ面晒して気絶しているに決まっている。そこに違いない。

探す、探す、探す

周囲を、地面を、瓦礫の隙間を、虱潰しに、見逃しが無いように探す。

腕に走る激痛を、歯を食いしばって堪えて探す。
何度も何度も瓦礫等に躓きながら、転びながら、形振り構わず探す。

ピョコピョコとツインテールを揺らして、涙声を上げながら付いてくる後輩が鬱陶しい 探す。

うるせえつつつてんだろ。犯すぞクソアマ 探す、探す、探す。

果たして、”ソレ”は其処にあった。

探し始めてどれ程の時間が経ったのか、実はそれ程経っていないのか。どれ程の範囲を探して回ったのか、巡り巡って漸く近くにあったソレを見つけたのか。確かにソレは其処にあった。

「
」

少し確認するだけで分かった。服は赤くて見間違いかとも思ったが、その手首に付けている銀のブレスレットは間違いなくアイツのものだったから。

誕生日プレゼントとして送った、正義の誕生石であるそれなりに高価なルビーをあしらったシルバーブレスレット。見間違えるはずも無かった。

「先輩？もしかしてお兄ちゃん見つけ ひっ。」

追いついた椎名ちゃんが、立ち止まっている俺に疑問を持ったのか、隣にやって来る。

そして、ソレを見て短く悲鳴を上げた。

確かに正義は其処に居た。いや、居たというより、”あつた”。クソツタレ、ふざけんなよチクショウ。誰か嘘だといってくれ。夢なら覚めてくれ。

俺は、右腕の肘から少し上までを失った。そして、そしてアイツは

右腕の、肘より少し上から全部失っていた。

「……嘘、いや、先輩嘘だよなこれ。冗談だよな。」

ああ、是非嘘にでも冗談にでもしてくれ。悪趣味な悪戯でも構いやしない。怒るところか、全裸でカレー食いながら、スタイリッシュに三回転して肥溜めに飛び込んでやるよ。大歓迎だ。

気が抜けたように、膝を突いてしまった。震える腕でアイツだった物を手に取り、胸に抱く。

気付いた時にはもう遅い。世の中そんなものだ。

だけど違った。俺は気付いた。気付いたんだ。自分の感情に気付いた、大切に思ってくれる友人に気付いた。気付いたから、これから始まる筈だったんだ。遅くなかった。間に合ったんだ。

けど実際は違った。世の中は気付いてしまったから終わりなんだ。きつとそうだ。気付いたからこそ、

正義はクソ垂れる暇無く死んで、俺は無様に喚き散らす時間を与えられた。

世の中クソだ。もう何も考えたくなくて。頭の中が真っ白になって。でもこの胸の中のどす黒い感情は、行き場を無くしてのた打ち

いづのは極自然な道理であるという事を、数ある歴史書の中からこの本を手についた総慧なる読者諸兄には理解頂けるであろう。

中略

建国暦2000年王国^{マクルト}の月24日 渡界者の世界では10月24日。

62代目マクルト国王フォルセティウス・マクルト・ユンググヴィ
「アドナイメレクの妻にして稀代の大召喚師であるフレイヤ・マクルト・オメテオトル」アドナイメレクによつて「大召喚」は引き起こされた。

その日、創造神エイン・ソフにより創られ、主アブラハムより平定されたこの地が穿たれ、彼らの「世界」は召喚されたのだ。

その日、彼らの世界は「死都」として終わりを迎え 「渡界者」となった彼らの物語は始まった。

歴史学者 サラスヴァティエ・ミーミル著 『大召喚』より一部抜粋

10/18 (前書き)

どうも、タムラカエデです。

今回はだいぶ盛って修正しました。

かなり表現も汚くなっておりませんが、こつこつ態でいこつこつと思いま
す。

ジーザス。神は死んだ。

目に映るものすべてが燃えていて。

知り合いはみんな潰れたトマトみたいになっでいて。

頼りがいのある背中とは、頭から脳みそぶちまけて頼りなく倒れて
自分を守るうとした大切な誰かも、そしてまた

そんな、夢を見た。

『Never give upを諦めるな!』

ベッドから体を起こして、とりあえず頭を掻く。

……断言してもいい、俺は今絶対に酷い顔をしている。具体的に
言えば、そう、この碌でもない歌にうんざりして眉根に皺が寄って
いる筈だ。

とか何とか思いながら、目覚ましで時間を確認する。あと10分
は寝れたじゃないか、クソツタレ。

『Look! 見ろ! 君の前にはEternity! 無限の』

別にこ洒落ている訳では無く、かといってそこまで質素という訳でも無いそこそこに生活用品が散らばっているワンルールの部屋に、壁から漏れたセンスの無い歌が響く。……目覚めは最悪だ。

『道！（Road！）道！（Road！）道！（Road！）道！（Road！）道！（Road！）』

訳が分からないクソツタレな歌のせいで、夢の内容が思い出せない。

思い出せないものは思い出さない方がいいとは、果たして誰の言葉であったか。いや、思い出せないものはどうでもいい事とかわったか。まあ、どっちでもいい。考えるだけで苛々してきた。

右耳で聞いたものがそのまま左耳から抜けていくなんて言葉があるが、それをどうにかして意識的に実行できないものだろうか。寝起きにこの歌は頭に響く

『Don't stopを諦めるな！』

ああ、クソツタレ。覚えとけよチクショウ。絶対に肥溜めにぶち込んでやる。

胸のモヤモヤとした気分を晴らしたくて必死に夢のないよう思い出してるんだっていうのに……まあ、思い出そうとするだけで胸糞が悪いから、どうせ碌でも無い夢なんだろうけどさ。

ジリリリリリリリリリ！！

悶々としてたら、目覚ましが鳴った。五月蠅い。どうやらアラームの解除を忘れていたらしい。クソツタレが、笑ってくれよマイゴツド。居ないけどな。

しょうがないので、八つ当たり気味に目覚ましを殴る。地味に痛い。お前の拳なんざ効かねえよと嘲笑うかのように、目覚ましは鳴り止む気配が無い。

……いい加減頭にきたので、音の漏れる壁に向かって結構本気で目覚ましを投げつけた。

『Yesterday! 昨日なんか知るか! さあTomorrow
w! 明日に向かって』

衝撃によって本体から飛び出た電池は、自分の頭から抜け落ちた夢のようだった。

という訳で、何時に無く最悪の朝だった。

例えば、夢見が悪かったせいで、目覚ましをセットした時間の10分前に目が覚めたりとか。……朝の10分は貴重だから、未だに惜しい事をしたとか何とか思っている。

例えば、暫く自分の夢に悪態をついてたらアラームが鳴ったので殴って止めようとしたら目覚ましに馬鹿にされたとか。……ジンジンと今なお痛む手に、何を馬鹿なことやってるんだと軽く自己嫌悪に陥ったり陥らなかったり。

例えば、朝っぱらからご機嫌な隣人が流した趣味の悪い音楽が、薄い壁からだだ漏れだったりとか。……ささやかな、あくまでささ

やかな抵抗として、壁に目覚ましをぶん投げてやったら、小気味よい音とともに目覚ましの電池が脱走した。抵抗も空しく、音楽が鳴り止むことは無く、おまけに目覚ましの電池は失くすすで、踏んだり蹴ったりだ。忌々しい。

例えば、飲もうと思っていた牛乳が切れていたりとか。……ああ、本当にコーヒー牛乳があつて良かった。無かつたら発狂して壁に穴開けていたかもしれない。

例えば、履く予定の靴下の片方がバカンスに出かけていたりとか。……有給許可した覚えは無いんだけどな。

例えば、例えば、例えば

とまあ、そんな感じに素敵に最悪な朝を、トーストの焼き加減を見ながらダイジェストに振り返っている訳で。というより、苛々することが分かつてるのに、何故俺はこんな不愉快な出来事をご丁寧にも思い出しているのだろうか。……馬鹿かと。阿呆かと。間抜けかと。随分とおめでたい頭になってしまったようだ。

小一時間という名の数分間、自分で自分を罵倒している間に、案の定こんがり焦げたトーストが出来上がりましたとさ。ジーザス、俺が何したっていうんだ。ぶち壊すぞこのポンコツトースター。

まあ、マゾ豚になる前に焦げた臭いに気付いたのは不幸中の幸いだろう。幸いな訳あるもんか、カミサマなんか嫌いだチクショウ。

とか何とか、性懲りも無く内心で愚痴を零しながら、半ば

やけくそ気味に焦げたトーストにバターを塗りたくる。誰かが居るのなら見せてやりたいくらいの見事な、バターかトーストか分からない物体が出来上がった。ざまあみろ、気持ち悪いくらいに美味そうだろうが。今なら隠し味で涙が入ってますよと自嘲する。

正直、自分で自分らしくないと思う。自分らしいって何なんだ、教えてマミー。知るかマイサン。ああ、チクシヨウ。お前に聞いた俺が間違いだっただよ、くたばれビッチ。

いや違う。何というか、俺はもっと、そう、クールでスマートだった筈だ。多分、きつと。

というより、そもそも自分には感情……というものがないので、自分らしいもクソも無かった。我ながら馬鹿馬鹿しい。

一連の出来事は全て無表情、無感動でお送りしております。眉根に皺が寄ったりしているのは気のせいです。かしこ……とんだ茶番だ。

だというのに、未だに胸のもやもやが収まらない。ひよっとして本当に苛々しているんだろうか。いや、ありえない。

何時までも益体も無いことを考えていてもしょうがないので、少しでも気分を入れ替えようと、テレビのスイッチを入れる。

『おはようございます。10月18日曜日、朝のニュースを

』

焦げたトースト味のバターを齧りながら　一口齧って、すぐに
コーヒー牛乳で流し込んだ。ああ、美味すぎだよチクシヨウ。しょっぱいのは青春です。

若干噎せながら、ニュースを眺める。

去年、議員との不倫のスクヤンダルで話題になった厚化粧の女性キャスターが、すらすらと普段と大して変わりの無いニュースを読み上げる。

馬鹿が騙して、馬鹿が騙される。阿呆が捕まえ、阿呆が捕まる。

間抜けの答弁、間抜けの謝罪。ゴミが勝つては、ゴミが負け。クズが売れば、クズが買う。エトセトラオンパレード、ウィーアーチャンピオン。

システム・オールグリーンで世は全て事もなし。母さん、今日も世界は平和です。もうやだこの星。

適当にニュースを聞き流しつつ、一口齧られた焦げたトースト味のバターをゴミ箱に放り込んで、新しい食パンを袋から取り出して齧りつく。

椅子に腰を下ろしてテレビに視線を戻すと、世界平和のコメデイニュースは終わり、恐らくニュースで一番価値のあるコーナーである天気予報に変わっていた。いや、天気予報でご飯三杯いけるから占いなんて無かった。

成程、どうやら漸く晴れ空が拝めるらしい。

先週から雨続きだったためか、久しぶりの晴れの予報に少し気分が和らいだ。

『走れ！(run!) 走れ！(run!) 走れ！(run!) 走れ！(run!) 走れ！(run!)』

訂正、更に増すように気分が悪くなった。

何時の時代もさよならは突然に、だクソツタレ。心の平穏は僅か数瞬で海の藻屑となった。

未だに音漏れがする壁に向かって、相方にワイハーのバカンスに置いていかれた靴下をぶん投げるが、壁にたどりつくことなく、虚

しく墜落して行った。

心なしか、音量が上がった気がする　余計に苛々する。

思わず舌打ちしてしまっただが、そんな俺を誰が責められよう。こんな事が日常茶飯事なのに、舌打ち一つで済む辺り自分で自分の心の広さを褒めてやりたい。感情無いけど。

まあ、なんとも有難い事に、そんな些細な事など知らぬとばかりに世界は面白おかしく回るわけで。つまるところ、平日である以上学校は通常運転するわけで。泣けてくるね、チクシヨウ。

曲り形にも、学生の身分である以上、ちよつとしたトラブルなどそっちのけで登校の準備にとりかからなくてはいけない訳で。結局は、そう。少しばかり不愉快ないつもと変わらない日常。ただそれだけの話。

付け加えて言うならば、今日は魔の月曜日であり、そんな最低最悪の日に早起きして、健気に登校の準備をする俺は学生の鏡である。そんな俺に、過去の偉大なる先人はこんな言葉を残している。

師曰く、思考を明後日に飛ばしている暇があったらとつと仕度しろ。……何とか、本当に世知辛い世の中だね、クソツタレ。

一旦ビシツと制服を着た後、適当に着崩して鏡を見る。

毎度毎度切れと言われる、少し目にかかる程度の日本人特有の黒い髪。

街を歩けば、ヤの付く人にいちやもんをつけられる困った位に細い目付き。

よく目が死んでると言われる、生気の無い瞳。
そこそこ見れる、多少整った顔立ち。その表情は、いつも通りの無表情。

眉が吊り上ってるように見えるのはきつと気のせい。トラブルが続いたせいで顔に若干影が差しているような気がしないでもないが、それもきつと気のせいだ。

まさかそのまま外に出るという訳にもいかないの、顔に笑顔を張り付ける。

ひょうきんで、どこか憎めない笑顔　生気のない眼はご愛嬌ということで一つヨロシク。

いつもの自分の外面が完成する。

うん、いい感じだ。ちよつとばっかし目付きの悪い、人当たりの良いお兄さんの誕生。うわあい、気持ち悪い。

別に他人からどう思われようと構わないけど、こんな事で人付き合いが上手くいくのならそれに越したことも無い。嫌われたと思っっている訳でもないし。ああ、世の中は難しい。

さあ、鞆は持った。笑顔も持った。後は中身だけ。

「　さあ、夜没恭介よもしきゆうすけを始めよう。」

始まりの合図を口にして、外面に内面が伴った。

親友から貰った喜怒哀楽の感情が体に宿る。……宿る、という言葉い方はおかしかったか。真似してるだけだ。

我ながら馬鹿馬鹿しくて笑えてくる。仮面を貼り付け、始まりの合図でスイッチを入れて　漸く喜怒哀楽の感情を表に出せる。

くだらないおまごことだ。偽者の仮面、偽者の感情。偽者の人間。偽りの人生。親友のように振舞うだけの簡単な仕事。

今更な話だった。どうせ世界は偽りだらけだ。右手に金貨、左手に刃物なんて当たり前。こんなご時勢、真っ正直に生きている人の方が珍しい。俺は　そう、少しばかり筋金入りの偽者っていうだけの話。グダグダしてないで偽者ライフを満喫しようかな。

今日もまた、一日が始まる

いい天気だ。

寝起きからの”ちよっとした”不幸も、最近の不穏なニュースすらも頭から吹き飛ぶくらいの快晴。昨日まで連日雨が続いてきたこともあってか、感動も一入だ。

朝特有の涼しい風が頬を撫でる　自然と身体が引き締まる。気分一新、時間も十分ある事だし少し回り道でもして　ぶべ!？」

突然背中に走る衝撃。どうやら身体が引き締まったというのは勘違いだったようだ。

足がもつれて、何かを掴もうとした手が虚しく空を切る。幸運は長く続かないのに、こういう訳か不幸は連続して訪れる。やっぱりカミサマなんて居なかったとか何とか思いながら

そのまま俺は、顔から地面に突っ込んだ。

違う、突っ込んだんじゃない。甘んじて受け入れたんだと格好良く言い訳させてもらおう。

「へい、ジヨニー！朝から地面とキスなんて熱いじゃねえか。…
…んで、お前はいつからポエマーになつたんだ？」

ジーザス・ガツテム・ファツキンベイベー。

天界でせせら笑っているカミサマを、どうやって亀甲縛りでドラム缶にコンクリ詰めしようかと顔をさすりながら考えていると、カラツとした声が入ってきた。

よつこらと上半身を起こして振り向いた先には、俺と同じ赤いラインの入った黒い学生服を着用した、見慣れた幼馴染の姿。俺に感情を教えてくれた大切な親友。そして究極に迷惑な隣人。

端正な、それでいてどこか子供っぽさの残っている顔立ちに、俺と違つて意志の強さが感じられる生き生きとした目。

胡散臭いが、どうやら地毛らしい赤味がかつた茶髪の爽やかイケメン。九翔正義くせうせいぎが、笑いながら手を差し伸べてきた。コイツ、さも自然そうにぬけぬけと……。

「……ついさっきからだ、ビリー。素敵な挨拶をありがとよ。涙が出るくらいありがたかつたんで お礼にお前もキスさせてやるよ。ああ、安心していい。地面は何時でも誰でもウエルカムだクソツタレ。」

地面とファーストキスをさせやがった奴の手を取る訳にはいかない。いや、ファーストキスって自己申告でいいよね。多分。心は何時でも初物なんだ。

とりあえず差しだされた手を払いのけて立ち上がり、自分では分からないが多分素敵な笑顔を作りながら、元凶に対して威嚇するように指の骨を鳴らす。

それを見た正義が、若干引きつつ顔を顰める。オイ。

「……」遠慮仕る。なんだ恭介、今日は随分とご機嫌斜めじゃないか。どうした、腹でも下したか？ん？」

全く悪びれもしない軽い物言いに、ほんの少し（当社比）カチンとくる。

「御陰様で朝から快便だよ、クソツタレ。そういうお前はどんなんだ。浣腸剤なら奢ってやるぞ。それがプロパンガスでもボンベごとケツに突っ込んでやるうか？え？」

「止めておくんまし。つーかよお、本当に大丈夫かお前？顔色わりいぞ？カバみたいな面してやがる。」

ブツチーン。リアルで何かが切れる音がした。具体的に言う、どっかの部分の毛細血管が2、3本位。あ、具体的じゃなかった。

というより、元凶のお前が言うか。しかも言うに事欠いてヒポポタマスかよこの野郎。

「お前のせいだよこのバカチン！いきなり背中に一発もらって怒らない奴がどこにいるんだ！！いつもより早く目が覚めてみれば、どっかの馬鹿が流してる趣味の悪い音楽が薄い壁ぶち破って聞こえてくるし何なんだ一体！いい加減にしとけよ、毎日毎日センス無い曲ばかり流して俺に恨みでもあるのかクソツタレ！！毎朝起きるたびに神経が磨り減るんだよ！！しばき倒して肥溜めにぶち込むぞ！！」

「ああ？そいつあ聞き捨てならねえな！テメエの方こそ毎日毎日

人が音楽鑑賞してるときに邪魔ばかりしやがってよお!!」

「TPOを弁えろって言ってるんだよ!ヘッドホン付けろって何回言えばわかるんだ!!それが無理なら音量下げるバカタレ!そして頼むからくたばれ!!」

> 回りだした口は止まらない!!

「TPO?はっ、クソ足しにもなりやしねえ!テメエは何時もそうだな恭介?何かに付けて『クソツタレ・くたばれ・肥溜めにぶち込む』だ!!きたねえんだよファツキン3K野郎が!そんなクソ野郎の末路は知ってるか?OSG。オー・サムワン・ゴツド、だ!どこかの誰かの名前も知らねえカミサマに天罰貰ってクソぶちまけて地獄に落ちろミルク野郎!!」

「格好良く他力本願するな!お前も大概変わらないだろうが!!それで、何だつて?カミサマ?はっ、八百万のカミサマでも何でも呼んでこいよ!全員ハングマンにして吊るし上げた後一人ずつ和式便所にポツシュートしてやるよ!!その後お前の最後の晚餐だ!パンとスライスどちらになされますかお客様?もちろん選択する権利なんか与えない!!オーケーだ、クソ垂れる暇すらないと思えよボケナス!!」

何というか、よくもまあここまで罵詈雑言が思い浮かぶ物だと我ながら驚いた。恐らくあの馬鹿も同じように思っているだろう。

頭の片隅でそんな事を考えながら、だがしかし口は絶賛フル回転中。

額をくっつけ合う形で、お互いにお互いの顔のドアップを眼に映

しながら罵倒し合う。

鼻同士もくつつきそうで、誰かが背中一つ押せば口までくつつき
そうで。うわ、寒気がする。

お互いの顔に唾を飛ばし合うほど大声で、周囲の目も気にせずに
互いを罵る姿というものは、傍から見ればとてもどころじゃなく滑
稽なものだろう。

それでも止めない。先に口の動きを止めたほうが負けなのだ。多
分。

段々とヒートアップしていく言葉の応酬。いい加減うんざりして
きたので、正義に口を開かせる余裕も無くなる程に捲くし立てる事
にした。耳かっぱじってよく聞いとけクソ野郎。

「いいか、よく聞けクソツタレ！何回目だ！！一体俺は何回お前に
あのイカしたバンドの曲を流すなって抗議した！？ああそうだ、洩
垂れ坊主がエリーゼのためにを耳で聞いて一音符も間違える事無く
暗唱できる位に言い聞かせた筈だ！！仮に一億と二千万歩譲って、
聞くのはまだいい！だが、ヘッドホンを付けると、イヤホンを付け
ると、音量を小さくすると、あれ程、あ・れ・ほ・ど言った筈だ！
！これも何回言った？え？そうだ、お前の耳にたこが出来てそのま
またこ焼きにして全国NO1チェーン店に出来るほど言った筈だ！
！俺は何時まで空港の騒音並みの公害を我慢すればいい？お前が死
ぬまでか？死んでからもいちいち壁を蹴り飛ばさないといけないの
か？お前が墓の中で呑気にマス搔いてる時に、毎朝墓石を蹴り飛ば
すのか？お前が地獄に行けば閻魔の髭でも引っこ抜いてくれば良い
のか？お前が天国に行ったならゼウスのツラでもかっぱらってくれ
ば良いのか？え？どうなんだ、クソツタレ！！俺の磨り減った神経
は1yヨクトでも残ってれば良い方だ！ああ、そうだ！！きっと夢見が悪
いのはそのジャイアンも泣いて土下座する不協和音のせいだろうよ、
チクショウ！飲もうと思つた牛乳も切れてるし、履く予定だった靴

下は片方　ああ、クソ！おまけに、久々の良い天気気持ち切り替えて、少し遠回りして散歩でもしようかと思つた矢先にさっきのアレだ！！ご機嫌斜め？当たり前前だ！なまじ気持ち切り替えようとしたせいで、俺のテンションはマイナスだ！怒りのボルテージなんてとつくの昔から天井知らずだよクソツタレ！！だいたいお前　「

「オーケー！オーケー！！分かつた、わーかつた！俺が悪かつたよ。頼むからこれ以上怒鳴ってくれな。」

堪らず正義が手を上げて降参のポーズを取る。ザマア三口。俺の勝ちだ。

「……ところで、俺が曲聴いてたら、毎度毎度どつかの誰かさんが壁に物を投げてくるんだが、何か言うことは　「

「　ねえよ！！！！」

まだ言つのかこいつは。

「　さいですか。つたく、本当に音楽の趣味に限つて言えば、お前と分かり合える日が来るとは思えねえよ。」

どうどう、と宥めるように俺の肩をぽんぽん叩くと、残念そうに正義は言った。

少しばかり言い過ぎたろうか　いや、俺の朝の至福の時間には変えられないのだ。といっても、永遠にその時間は来る事が無いのは分かっているだけだよ。次の日にはケロリと忘れて同じことの繰り返しだ。今までの経験でもう諦めている……本気で部屋を変えてもらおうか。

「そうでもないさ。……槍が降ってくる頃にはきつと分かり合える。」

まあ、今更な話なので、適当に締め括っておく。

「違いねえ。」

正義がにやりと笑って　つられて俺も笑ってしまった。

ああ、いつもの日常だ。

俺と正義にとって、大小の違いはあれど、この程度の言い合いは日常茶飯事だ。

顔を合わせれば文句の言い合い、なんて事も珍しくない。しょっちゅう殴りあいもするし。俺は蹴るけど。

元々俺たちは、あまり人に声を荒げさせるような真似はしない。

まあ、例外はあるが。

お互いに面倒事が嫌いなので、言い争いが起こり得る場面になると、すぐに自分を引っ込め、適当に話を切り上げ、事を丸く収める。大体上手くいくし、駄目ならお察しだ。

俺は正義だからこそ、多分正義は俺だからこそ、心おきなくボロクソ言い合って、適度に日常のガス抜きをする。

相手に何かあったと感じたら、適当に突っかかって、面白おかしくおちよくって　その代償に相手の抱えているものを体一つで受け止める、そんな関係。魚心あれば水心。大体そんな感じ。素晴らしきかな幼馴染。泣ける話だね。

今回も、そう。多分俺の憂鬱な気分を足りない頭で察した正義が、ありがた迷惑にもどうにかしてやるめえと突っかかってきたのだろ

う。……原因は9割り方この馬鹿なんだが。

正義が手を出してこなかったら、俺の方から突っかかって行っただろうという話はこの際どうでもいい事だ。

相変わらずお節介な奴だ、と独りごちる。

気分転換したつもりで、その実片隅に追いやっていたもやもやしていた気持ちが、大分晴れた気がした。

「ん？何か言ったか？」

「いや別に。何でも御座いません。」

教えるよーと、ヘッドロックをかましてくる正義から身を躲しながら、今日のコイツのファッションチェックを行う。

ボタンを外して着崩された制服からは、黒い布地に赤いプリントが施された、正義お気に入りイカレたバンドのTシャツが嫌でも目に入る。カッターシャツを着るとあれ程教師陣に絞られたのに、懲りずに今日も着ていない。

首元には家族の写真が入っている洒落た銀のロケットペンダント。左耳には正義の家で家族会議を勃発させる原因となった3つのイアローブのシルバーリングピアス。

右の手首には、俺が誕生日プレゼントとして送った、亡くなった俺の母上の宝石箱から失敬したそれなりに高価な正義の誕生石であるルビーをあしらったシルバーブレスレット。

まったくもって何時もと変わらなかった。

というか、何でもこいつはこんなにもシルバーアクセが似合うのだろうか。普通にカッコいいし。チクシヨウ。俺もお前から貰ったけど、そこまで上手く付けこなせないぞ。いや別にどうでもいいんだ

けど、やっぱり同じ男として少しは思うところがある。俺でこうなのだから、他の男からの妬みとか凄いだらうなあ。……男の嫉妬は肉体言語だからなあ。まあ、コイツ強いからいいか。ちよっと残念だ。

見方を変えれば、というか変えなくても不良にしか見えないんだけど、ちつとも凄みが無くて怖くない。

ああ、だからモテるのか。……それに関してはご愁傷様としか言えない。

でもこのナリで、成績優秀、運動能力抜群っていうのだから、世の中分らない。というか分かりたくない。カミサマは死んだのだ。

……今更な話だった。

閑話休題。

何時もと大して変わり映えのしない正義を見るのも飽きたので、ならば何時ものようにコレと雑談でも楽しもうかと話題を探している。

「……あの、お兄ちゃん、先輩。……もういいかな？」

どこか申し訳なさそうな、澄んだ声が聞こえてきた。

「……ん？」

なかなか決まらないヘッドロックに業を煮やした正義が放つてくるアイアンクローを避けながら、聞き覚えのある声の方へ顔を向ける。

そこには、青いラインが入った黒い学生服に身を包んだ、くりく

りつとした可愛らしい目が特徴的な、小柄な少女の姿。

健康的な肌色に、肩を少し超えたあたりの綺麗な黒い髪は、頭の上のほうから左右に垂らされツインテールとなっている。

艶のある小さな口から、疲れたように溜息を一つ吐いた正義の妹九翔椎名くしやうしいなが、少し恥ずかしそうに顔を赤らめ、困った顔をしていた。

というか、居たんだ椎名ちゃん。ごめん、全く気付かなかった。

「なんだ、椎名じゃないか。いつからいたんだ？それと、恭介の前だからって恥ずかしがるなよ。もっとオープンに行こうぜシスター。」

いやそこは気づいとけよ馬鹿。妹だろ。というか何故そこで俺が出て来るんだクソツタレ。

余談であるが、俺が借りている学生寮の部屋割りには、俺、正義、椎名ちゃん、と正義を挟むようにして俺と椎名ちゃんが暮らしている形となっている。

もう一つ余談であるが、俺の借りている棟は女人禁制で、男子専用である。

また一つ余談ではあるが、どういう訳か男子専用の棟で椎名ちゃんは安全に暮らしている。

これまたもう一つ余談ではあるが、椎名ちゃんが寮で暮らし始めてから約1年の間、椎名ちゃんの部屋の近くで謎の男子生徒の悲鳴が聞こえることが少なからずあった。今はもうそんな事ないけどね。番犬ヨロシク、兄の力は偉大である。ちなみに俺は何もしていない……ホントだよ。

それはともかく、今回は俺も失態だった。用事がある日以外は大体一緒に学園に登校しているんだから、居て当然なのである。ごめ

んね椎名ちゃん、マイゴツドに頭下げさせるから。居ないけど。

「おはよう椎名ちゃん。この馬鹿の言うことはほっといて」

「誰が馬鹿だ!!」

「お前以外に馬鹿がいるなら教えてほしいね。……ああ、ごめん。それでどうしたの?」

すつとぼけた感じでアホな茶々を入れる正義を軽く一瞥して、今まで放つたらかசிにしてしまった椎名ちゃんに笑顔を振りまく。

「お兄ちゃんの馬鹿! 部屋を出る時からずっと一緒にいたじゃない!!」

やっぱりか。それでも健気に気付いてもらうのを待っていた椎名ちゃんに乾杯。後でコーヒー牛乳を奢ってあげよう。

「……つて違う、二人ともこんな朝っぱらから何騒いでるの! ……いや、先輩がちょっと元気なさそうだったから、お兄ちゃんが突っかった時はナイスだと思ったけど……けど!! 騒ぎ終わったんならすぐにここから離れようよ! 恥ずかしいじゃない……。」

ぶくう、と可愛らしく頬を膨らませて怒ったと思ったらしょんぼりして、また可愛らしく怒ったとおもったら顔を真っ赤にして恥ずかしがって。どっかの誰かさんと違って、椎名ちゃんはこころごと表情を変えるので、飽きないし癒される。忙しい子だなあ、と思わず苦笑してしまったのは内緒だ。

しかし、恥ずかしい、ね。……ああ、確かにこれは恥ずかしいな、

椎名ちゃんには。

少し周囲を見渡しただけで、椎名ちゃんが顔を真っ赤にする理由に納得してしまって、また思わず軽く笑ってしまった。癒される。

さかきがおか
榊ヶ丘学園

学生寮の入り口の真正面。そこにいるのは当然、人目も憚らずに早朝から元気良く騒いでいた俺と馬鹿及び、好奇の視線に晒されて顔を真っ赤にする哀れな椎名ちゃんがいた訳で。

もう少し噛み砕いて言うと、今現在俺たちは、榊ヶ丘学園の遅刻常習犯の集団に囲まれて見世物状態という訳で。いや、見世物状態なのは、さっきから馬鹿馬鹿と連呼されてショックを受けて蹲っている正義だろう。まいったねこれは。いやマテ。

ジーザス。不味い、何が不味いかって言うと、青汁くらい不味いやそれは当たり前だ。

恐る恐る腕時計を確認してみたが、まるで死刑宣告を受けたような気分だった。なんて軽い死刑宣告。クソツタレ、柄にも無く細い目を見開いてしまった。

そう、つまり何が不味いかって言うと、青汁を飲んで腹の調子が悪くなったので急いで学校まで走ったけど遅刻してしまったというオチないオチぐらい不味い。バカヤロウ、要するに遅刻しそうなだよ。

状況をよく分かってないクソツタレ共にも死刑宣告を与えるべく、荒げなくてもいい声を荒げる。

「おい！！時間がやばいぞ……急がないと間に合わない！何やってんだこの馬鹿！！置いてくぞ！……おいコラ！！お前らもいつまでも群がってないで学校まで逃げ！俺たちに時間を割いてたせいで遅刻なんてことが教師陣にばれるようなことがあったらわかってるな？ケツにアセチレンをボンベごとぶち込まれなくなかったら

「つさつさと走れ！！散れ、散れ、散れ！さあ、椎名ちゃん走ろう！」

お開きな雰囲気につつくさ文句を言ってた遅刻常習犯たちは、1割冗談9割本気の死刑宣告を受けて一目散に走り出す。当たり前だ、本気に決まってるだろ。こいつらの遅刻のとはっちりなんてたまたもんじゃない。俺は誰にも目をつけられることが無い平和な世界を生きたいんだ。良い意味でも、悪い意味でも。つまり、肥溜めにぶち込まれなくなかったら馬車馬の様に必死に走れボケナス共。

「というか、さっきから地面に蹲ってる”コレ”は何だ。さっきの聞いてなかったのか？というか聞いてて拗ねてる振りしてるのが正解だろう。親友の好だ。軽く本気で蹴り飛ばして焚き付けてやる。あ、綺麗に決まった。」

「！！？」

俺は悪くない。寧ろお前が起き上がるのを手伝ってやったんだから感謝しろ。そこから起き上がって学校に間に合うか間に合わないかはお前次第だ。結果はカミサマのみが知っている。そして残念な事にこの世にカミサマなんてのは居ない。ざまあないな、クソツタレ。あばよ正義。」

「ほら、行くよ！！」

「きゃ！？先輩、私、一人で、大丈夫、ですから！」

馬鹿に構いすぎたので、急いで椎名ちゃんの手を取り走り出す。突然手を取られ、椎名ちゃんは少し頬をピンクに染めて慌てるが、そんなもの無視無視。聞こえないね。」

自分と正義が馬鹿やってたせいで、妹の様に大事な椎名ちゃんが教師に御叱りを受けるというのはあってはなんなのです。あれ、俺って今紳士？うわぁい、気持ち悪い。何やってんだ俺は。

椎名ちゃんの手が柔らかくて握り心地がよかったのは決して、決して関係ない。多分。

ちらりと腕時計を見る。このペースでいけば間に合いそうだ。

「……はあ、はあ、先輩、少し、ペースを」

もっとも、椎名ちゃんの体力がもてば、の話だが。

クソツタレ、もう少しぐらい男見せるよ。いや、椎名ちゃんじゃなくて椎名ちゃんの体力ね。

「うおおい、俺は置いてけぼりかよ！！ちょっとタンマ！ケツが！！」

遠くから声が聞こえる。あ、忘れてた。……アレはもう駄目だ、捨てて行くっ。

どうやら走ることで精一杯な椎名ちゃんには、地面に蹲って助けを求める馬鹿兄貴の声が聞こえていない。良い事だ。気付いたところはどうしようもない。

哀れ正義、南無。大丈夫だ、お前の骨はちゃんと拾って肥料にしてやる。骨壺の中身は空っぽ。本当にクソツタレな世の中だ

これは、そんな日常の朝。

『目標、包囲網を突破しました!!』』

結論から言うと、何とか遅刻は免れた。正義以外は。いやあ、椎名ちゃんが頑張った。

『何をやっているんだ!!現在の目標の位置は!?!』

1限目の半ばにやってきた正義は、その日の授業が終わるまでお尻を気にしていた。

『依然として本館2階を逃走中!3階へ上りました 進行方向、部室棟です!!』

「……で、何やってんだありや。」

放課後、中庭で正義と一緒にジュースを飲んで黄昏ていると、妙に刺々しい声で話しかけられた。

『よし、待機部隊は二つに分かれる!1隊は部室棟の入り口という入り口を封鎖!!もう1隊は校内放送で内部で活動している生徒に協力を仰ぎ、窓及び部室の入り口の施錠を促せ!捕縛班はそのまま目標を部室棟まで追いたてる!!』

「さあね。何時ものやつじゃないの?」

放課後から、ずっとこんな調子だ。まだ朝の事を根に持っているのだろうか。正直勘弁して欲しい。

『Yes, ma'am!!』

「暇なんだなあパーシーたちも。あーあ、ケツがいてえ。」

いやに突っかかってくる正義に、少々苛立つ。ケツの穴の小さい男だ。

『目標、部室棟内に侵入しました!!』

「よかつたじゃないか、ケツの穴が広がって。これで実はともかく、名ではケツの穴のでかい男になりましたとき。」

だから、俺が妙に喧嘩腰に返してしまうのも、きっと自然の成り行きなんだろう。

『入り口封鎖の人員以外を全て部室棟の正面玄関に回せ!!』

「ああ？俺がケツの穴の小さい男だったのかミルク野郎。」

正義が、コーヒーの缶をぶつけてくる。負けじと俺もコーヒー牛乳のパックをぶつける。

『会長、全員揃いました!!』

「……オーケー。投げ返すって事は、喧嘩を買ったっつーことで良いんだな。」

正義がニヤリと、まあなんとも悪そうな笑いを浮かべる。

『よし……今日こそ必ず奴を捕らえるぞ!!』

「……違うね。俺が売ってお前が買ったんだよ、クソツタレ。」

血の気が多いというか何というか。折角の一等地に居座ったのに、生徒会の大捕り物のラストを見ることは出来なさそうだ。

そんな俺の嘆きなど知らないと、正義は立てた親指を下に向けて対応するように、俺も立てた親指で首を刎ねる動作を入れて。なに、もうお馴染みだ。

『全部隊、突入しろおおおおおおお!!』

「いい度胸だ、クソぶちまけて地獄に落ちろ!!」

「いいね、肥溜めにぶち込んでやる。クソ垂れ流す暇もないと思えばケナス!!」

『Yes , ma - am!! goo! goo!! goo!!!!』

四方全てを校舎に囲まれた中での喧嘩。どうせなら夕日を背負って戦いたかったかと思ったりもしたが、これはこれで楽しかった。熱いには興味なかったし。

何時もそうだ。どちらかが苛々としていたら、必然的に喧嘩になった。何時でもどちらかがくだらない事で喧嘩吹っかけてきて、殴り合って、最後に笑って。

つまり、そう。そのくらい俺たちは仲が良かった。

『クソツ！また逃がした！！』

結局この日は、部活が終わった椎名ちゃんが止めに入ってくるまで殴り合っていた。俺は蹴ったけど。

勝敗は付かなかったが、正義も落ち着いたようなのでよしとしよう。ただ

「いや、さ。ケツが痛かったんだよ。マジで。」

喧嘩を吹っかけてきた理由が、まさか本当に朝の事だとは思わなかった。ジーザス。カミサマは死んだ。

これからは、極力正義の尻に気を使って接していこうかとも思ったが、どうせ明日になれば忘れられると思っただけに考えるのを止めた。多分、今日は虫の居所が悪かっただけの話だろう。だって正義だし。そうだよねゴッド。だがそんなものは居ない。なんてこった。

というかケツが痛いだけで、喧嘩吹っけられた俺のやり場の無い気持ちはどこに行くんだ。どこにも行かない。だって感情無いし。

ああ、チクシヨウ。やっぱり世の中クソツタシだ。

……と、まあ。こんな感じに普通の高校生だったさ。話して、喧嘩して、笑って。どこにでも居る普通の高校生だったよ。

始まりなんてものは無い。大体、『大召喚』なんていうのは、そっちの都合だけで行われたものだ。こっちの都合なんてお構いなしに召喚してさ。本当に世の中クソツタレだ。多分、誰に聞いても同じ答えだと思っよ。始まりも終わりもへったくれも無いさ。

ただ。ただ、そうだな。オレにとっての始まりは……きつとこの日からだったんだと思う。』

10/19 (前書き)

ご機嫌麗しく、タムラカエデです。

流れとしましては、先に日常編を全部投稿しようかなということに。はい。

今回も結構盛っております。大筋は変わっておりません。きたねえ話だ。ひい、ゴメンナサイ。

ではどうぞお楽しみください。

とにかく、赤かった。

バラバラの獲物も、踏み越えた死体も、みんな赤かった。

見慣れた森も、家も、赤く燃えていた。

追いかけた来た人も赤くて、庇ってくれた人も赤くなって。

そんな中、自分はただ一人

そんな、夢を見た。

『束縛された Liberty！ 選択肢の無い Freedom！』

とりあえず、体を起こす。壁から漏れる歌に、自然と頭に手が行く。

ジーザス、そら見たことか。結局昨日あれだけ言ったにも関わらずコレだ。いい性格してるよホント。嫌になるね、チクシヨウ。

とりあえず、目覚ましを確認する。

……秒針が動いていない。クソツタレ、電池入れるの忘れてたな、そっつえば。

『不自由な自由？（Shit!）自由な不自由？（Fuck!）
訳わかんねえぜbaby』

昨日、もう一言ばかりでも付け加えて言っておくべきだったか。そうすれば、あるいは今日ぐらいいは気持ちのいい朝を迎えることが出来たのかもしれないのに。……いや無理だな、今更だった。ああ、頭に響く。

右耳に入った傍から左耳から抜けていく奴だ。アイツの頭は藁でも詰まってるのか？無いな。どうせボンヘッド、頭の中身はスカスカだ。藁のほうがまだマシだクソツタレ。というか、俺にもその無駄な技能を伝授して欲しい。切実に。

あれ？これ左耳に耳栓つけさせれば解決じゃないか？とか、まるで天啓にうたれたような思いつきに一抹の希望を抱くが、カミサマなんか居ない。居たらくたばれ。つまりくだらない妄想。淡い夢はどぎつい現実に塗りつぶされるなんて当たり前。酷い世の中だとか何とか思いながら、頭を振って馬鹿馬鹿しい考えを頭の隅に追いやる。

とりあえず、クソの役にも立たない目覚ましを、苛々をぶつけるように音漏れの激しい壁に投げつけた。

『うおっぶ!?!』

前言とは撤回するものであって。要するに、目覚ましはクソ程度の役には立ちましたとさ。

壁の向こうからの声に多少気分は良くなった。あれ？他人の不幸で飯が美味しい奴だったのか俺は。その通りでございます。馬鹿の悲鳴は蜜の味。馬鹿限定で一つヨロシク。……どうやら頭の中はまだ寝ぼけ気味のような。

そんなおめでたい頭に活を入れる元気も無い訳で。つまり、腹が減ったんだよバカヤロウ。

感情は無くても腹は減るもので……ああ悲しきかな、一人暮らし。腹が減っても、それを満たす物を作るのは自分な訳で。

溜息が勝手に口から漏れた。

動かないことには何も始まらないので、とりあえず、魅惑の魔法をかけてくるベッドからの脱出を試みる。魔法なんか無い。脱出は簡単だった。暖かい布団への名残惜しさなんて、とつくに虚無の彼方に消えていた。

『さあ！ザー、ザー、んだ！！ザー、Freeザ』

どうやら目覚ましのぶつけ所が良かったらしい。ザマア三口。

衝撃によって奴のコンボが狂ったのか、はたまた音に驚いて正義が操作を誤ったのか。どちらでも良かった。だってどちらにしても俺にとっては有り難い事だし。これを機に、正義の心が入れ替わってくれることを願うばかりだ。……今のでコンボ壊れていてくれな
いものだろうか。

そんな事を願っていても、世の中そう上手くいかないなんて事は理解できている訳で。結局夢物語だ。つくづくクソツタレだなと絶望する。あれ？なんか思考がループしてる気がする。

ああ、カミサマ。願わくば、せめて部屋を出るまでの間だけでも正義のコンボの調子を元に戻さないでください、アーメン。

天井を見上げて、らしくも無い祈りを捧げる。そしてカミサマなんて居ないのだ。

ジーザス・ガツデム・ファツキンベイバー

だからこんな暴言を吐いたところで、天罰が落ちてくる訳でもなく。

この際なので、気を紛らわせようとしてくだぐだと益体も無い事を考えていた事も、臆気にしか思いつけないクソツタレな夢の事も、やり場の無いモヤモヤとした気持ちも、ざわめく胸も、全部全部居もしないカミサマのせいにして ああ、チクシヨウ。絶対に肥溜めにぶち込んでやる。喜べ、サービスでコンクリの落とし蓋もつけてやるよ。

まあ、いい。とりあえず

とりあえず朝食を準備して、座椅子に座り一息ついた頃には、世は事も無しの平和なおめでたいニュースは終わっていた。

食卓という程立派でもない小さなちゃぶ台には、昨日と違い焦げる事の無かったイチゴジャムを塗りたくったパンが2枚と、昨日買い溜めしておいた牛乳。素晴らしい朝食だ。というか、これでパンが焦げてたら脱糞する程驚きだ。だって焼いてないし。

麦ご飯と沢庵並みの質素な朝食に特に思考を割く訳でも無く、とりあえずパンを齧りながらニュースを見る。

『 以上のように、小規模ながらも連続した地震が各地で起こっています。』

ジーザス。どうやら、世は事もあつたようだ。地震のニュースに向けていた目が自然と細くなる。

妙な事に、ここ最近になって自然災害系の報道が多くなった。微笑ましい事件や事故もそうだが、自然災害も報道されなだけで、実際はそれなりに起こっているのだらう。それが、テレビで報道される程頻繁に、ある程度の規模で起こっているのだから、地球様はどれだけお怒りなのかと柄にも無く不安になってしまふ。感情無いけど。

ちょっとした事件やら事故であれば、俺や正義であればどうともなる。多分。そういうことが起きないように慎ましく生きている訳だし。まあ、向こうからやってくるのであれば容赦しないけど。

だが、これが自然災害となってくるとお手上げな訳で。大自然の前に人間風情が手も足も出る筈が無いので、地球様の怒りが静まるのを祈るばかりだ。

ああ、ゴッド。どうにかならないものですかね。居るわけがないに何とかなる筈も無い。何という役立たず。ああ、本当に世の中クソタレだ。え？神の怒り？そんなものは使い終わったティッシュと一緒にゴミ箱行きだとか何とか。

危つく口から出そうになった世迷い言を、牛乳と一緒に一気に飲み干す。とりあえず新しく牛乳を注いでテレビに視線を向け直した頃には、ニュースは別のものに変わっていた。

誰かが殺して、誰かが死んだとか何とか。大して興味が沸かないどうでもいいニュース。昨日も似たようなのを見た気がする。こういうものは大抵数日後には、嫌な事件だったねと奥様方の世間話の種になるのが世の常だ。墓の中の仏様もすすり泣いている事だらう。ああ、成程。幽霊なんてものが居るわけだ。いや居るわけない。死人に口無し。無情な世の中である。

今は亡き親父様は、人の死に様には2種類あると仰っていた。

曰く、クソ垂れ流す暇も無く死ぬか、クソぶちまけて死ぬか。
不幸を嘆く 不幸を喚き散らして

大概が前者らしい。後者の場合は幸せな死に方だそうだ。

普通は、人は何が起ったか理解できずに死ぬ。車に撥ね飛ばされようが、ナイフで刺されようが、首をへし折られようが、銃で撃たれようが、起こったときには何がなにやら理解できない。

戦場にいたとしても同じだ。肉林弾雨の中、こういう可能性で死ぬかもしれないと思っけていても、実際に脳や心臓にトンネル開けられた時には理解できない。というより起こったことすら分からないだろう。

それが老衰であつたとしても同じ 理解できた時には死んでいて、死んだ後から理解する。

その日その場所にいた事を、その状況になつた事を、その原因を、死因を、不幸を、後悔を、絶望を嘆くことも出来ず。伝えたいことも伝えられず。やり残した事も、どうする事も出来ず。それを悔いだと気付くことも無いまま、未練が未練になる前に、全てを胸の内に抱えて哀れに死んでいく。

さよならは突然に。立つ鳥跡を濁さず。目覚めてみれば墓の中。そんなクソツタレな人生。

例外は、死が確定していて、尚且つ死に至るその時までには猶予がある場合。

例えばそれは、死刑宣告を受けた囚人であつたり、余命を告げられた病人であつたり、額に銃口突きつけられた人質であつたり。

そつという人たちは、己の不幸を嘆く時間を与えられた訳で。

笑える程無様に、嗤えない程醜悪に、驚く程汚らわしく、目を背

けたくなる程みつともなく、目を外せない程形振り構わず、夢に出てくる程恥も外聞も捨てて 己の不幸を、絶望を、後悔を、想いを、未練を、全てひっくりくるめて、おもいつきり腹の底からぶちまける。

それは、とても素晴らしい事だと。そうすることが出来るのは、とても幸せな事だというのが偉大なる親父様の言。

だけど、俺はそうは思わない。

首に縄をかけた時、ギロチン台に向かう時、電気椅子を目の前にした時、短刀の切っ先を腹に当てたとき、頭に突きつけた銃の引き金に手をかけた時、潰れたトマトになる直前。そんな状況に陥った時は、頭の中が真っ白になるか、悲鳴を上げる事ぐらいしか出来ないだろう。良くてせいぜい、死にたくないとか程度だと思っ。口にシヨットガンぶち込まれたところで、引き金を引かれるまでの間に出てくるのは涙とシヨンベンだけとかそういう話。現実には醜いのである。

まあ実際は知らないし、興味も無い。本当にそういう人も居るかもしれない。所詮、まだ人生の半分も生きていないケツの青いガキの戯言だ。アニメや漫画のような、劇的な死もあるところにはあるのだろう。

どちらにしる、ぶちまける本人は良くても、ぶちまけられた方はいい迷惑だ未練という話。

ぶちまけられたクソ未練に寄る人間は居ない。喜ぶのはそれ集るハエぐらいだ。

目の前のニュースがいい例だ。マスコミハエが必死ネタにクソを探している。そういう事だ。一度ぶちまけたクソは、便所時間が経つに流されるまで無くなりはない。流れたところで、臭い記録が残る。文字通り、人生の汚点。クソツタレの烙印。

そもそも、仮にぶちまける事が叶ったとして、果たしてそれが本当にぶちまけたかった事なのかどうかも怪しい。

人間本当に伝えたかった事なんて、三途の川の渡し舟の上で、酔ってゲロ吐いて運び屋に背中さすって貰ってる時に思い出すのが関の山だ。

気付いたときにはもう遅いのが世の常であつて。どうせ死んでから本心に気付くのであれば、ならば俺はクソ垂れずに死にたいとか思う今日この頃。

思い出せない事はどうでもいい事で、気付けない事も同じくどうでもいい事で。ならば、生きてる内に気付けない本心は、その人生においてどうでもいい事なのではないか。とか何とか、身も蓋も無い事を考えてしまう訳で。

結局、何が言いたいかというのだ。人間食べて寝るだけで幸福だというお話。今日も幸せだパンが美味い。ふざけるな、美味いわけあるかチクシヨウ。飯食べてるときにクソの話なんかするべきじゃなかった。もう2枚目のパンを食べる気も起きない。塗りたくったジャムが汚物にしか見えないじゃないか、クソツタレ。

こんなクソな与太話を思い描かせてくれたクソ親父と報道中の仏様に、とりあえず牛乳で乾杯。いい笑顔でサムズアップしてくれてありがとう親父。嘘だ。親父の顔なんか覚えてない。ジーザス。とんだ親不孝者だ。

…… 本当に笑えてくる。顔どころか何にも覚えていないくせに。何を考えているんだ、俺は。

とりあえず、テレビを消して。

とりあえず、余ったパンをゴミ箱にぶち込んで。

とりあえず、身だしなみを整えて。

「……さあ、夜没恭介を始めよう。」

とりあえず、始まりの合図を口にして、靴を履いて鞆を持った頃には、先程のクソ話も頭の中から消え失せていた。

……起きたときからとりあえずだらけだ。けどこの胸のモヤモヤは、とりあえずでは片付けることが出来なくて。願いが叶ったのか、あれ以降隣の部屋から曲が流れてくることが無くて。だがしかし、そんな事にも気付かない程に、今朝から俺はらしくなかった。馬鹿馬鹿しい。らしいって何だ。俺にらしいもクソも無い筈だ。

とりあえず気分を切り替えるために、両頬を軽く叩く。

うん、これで大丈夫だ。俺には悩みも何も無いのだ。とか何とか、その行動こそが俺らしくないということにも気付く事が出来ずに。そして気付けないことはどうでもいい事であって。

とりあえずの一日が始まった。

俺は、急いでいた。

具体的に言うと、部屋の外で出待ちしていた馬鹿面の馬鹿を問答無用でしばき倒して肥溜めにぶち込みたいところを、コブラツイストをお見舞いするだけで勘弁せざるを得ないぐらいに急いでいた。

実際のところは、そんなくだらないことを考えれる程度には友人

との約束に余裕があるのだが、目の前の親友に構っていると必然的に時間を削られてしまう訳で、やっぱり俺は急いでいた。

「 やってくれたな恭介。さて、こいつめどうしてくれようか。」

おはよう、死ぬ。と、開口一番に文句を言いながらパンチしてくる正義。ゴングなんて無かった。この辺り俺たちの仲の良さが窺える。仲なんて良いわけあるか。クソの足しにもならない薄っぺらな友情に涙が出てきた。

正直相手にするのも面倒臭かったが、ただ殴られるのも嫌なのでとりあえずカウンターを返す。

なんてこった。慣れないパンチがクリーンヒットするくらいには今日の俺は冴えているらしい。つまり正義は鈍い声を上げて地面に倒れた。

また何か言われるのもそれこそ面倒なので、起き上がる正義に先に先制しておく。

おっと、文句なら一昨日言ってくれ。今日は誠との約束があるんで、昨日みたいに正義に構ってる暇はないんだよ。」

事実である。昨日みたいに遅刻しそうになつては目も当てられない。

カウンターを綺麗に貰って頬をさする正義は、少し目を見開き真剣な表情で俺を見てきた。

らしくないな、どうしたっていうんだ。ひよっとするとひよっとして、本当にコンボが壊れたのだろうか。

だとするならば、涙が出る程にありがたくて、今に限って言えば

カミサマへの文句を本を出せるくらいに書き綴れる程ありがたくない。

「……どうした？俺の顔になんか付いてるか？生憎お前ほどイケメンじゃないんで、見てて楽しい顔だとは思わないんだけどね。」

「……んにゃ、なんでもねえよ。で、まこつつあんと約束？なんだ、頼まれごとでもしたのか？」

なんでもない、と頭を振る正義。結局コンボは無事なようだ。もし壊れていたのならば、こんな潔く引くわけが無い。そんな不幸とこの場に限ったの幸運を噛み締めつつ、ならば先程の真剣な表情は何だったのかと考えを巡らせ。

「そんなところだよ。ちよつと書類の整理に手間取ってるんだと。そら、椎名ちゃんも来たことだし早く行こうぜ。」

「待つて！お兄ちゃん置いてかないで〜！」

ツインテールを揺らしながらパタパタと走って来る椎名ちゃんに気付いたところで、その考えを便所に流した。

考えたところでしょうがない。分からないことは明日やろう。明日やろうは馬鹿野郎。馬鹿で結構クソツタレとか何とか。

可愛らしい椎名ちゃんを見て、俺と正義は顔を見合わせて笑い、足早に登校した。

そら見たことか。結局急ぐ羽目になるんだ。

だけど3人で小走りしている時には、もう胸の毛もやもやなんて消えていて。けどそれに気付くことは無いくらい、それはどうでもいい事だった。

某県、神代市、榊ヶ丘町。その由来とも言える榊ヶ丘の麓に位置する私立榊ヶ丘学園。

そこに通う、榊の花が描かれた校章を胸につけた黒い制服姿の男女は、赤、青、黄の三色のラインで学年を分けられている。

黄色いラインの入った制服は一年生。椎名ちゃんを含む青いラインの入った制服は二年生。そして

「誠、これはあの棚に纏めて置いてくよ。」

「ああ、それでいい。それで最後か？……いや悪いな恭介、助かったよ。」

俺や正義と同じ、赤いラインの入った制服に身を包む^{しまこと}柴誠もまた、三年生だ。

腰より少し上まで伸ばした綺麗な黒髪をポニーテールに纏め、キリっとした目が特徴的な端麗な顔。

俺より少し低い程度の、女の子としては高い身長。すらりとした肢体には人目を引く豊満な胸。

男らしいというか、凛々しい性格。クールビューティーという言葉^をを体現したような姿の彼女は、榊ヶ丘学園の生徒会長を務めている。

そう、高校三年、10月も後半だというのに、だ。

榊ヶ丘学園では9月から10月の間に生徒会選挙が行われるのだ

が、どういふ訳か今年には会長職の立候補者がおらず、彼女が卒業するまでの間に現生徒会執行部の中から後任を選ぶ、という学園的超法規的措置がとられている。

センター試験もあるのに大丈夫か、とか友人としてはほんの少し以上に心配なのだが、その忙しさ故かもう引退した筈の他の執行部員も引つ張つてきて何とか活動を行っている辺り、その情熱は計り知れない。本人が良いのならそれで良いのである。大丈夫がこの学園。

そんな彼女は、生徒会長という生徒代表としての責任からか、彼女の人間性からなのか。よせばいいのに、生徒会の仕事だけではなく教師陣の使いっ走りとしても日々学園を奔走していて、生徒たちから憐れみと尊敬をこめてパーシー君と呼ばれるくらい学園中の人望を集めている。そんな人望いらぬ。だから後任がいぬんだ。不憫な友人に、時たま目の前が霞んでしまいそうになるとか何とか……尤も、彼女に面と向つてパーシー君と言えるのは正義くらいなのだが。

俺は数少ない友人と思える彼女をそんな名前でも呼ぶつもりなので、普通に誠と呼んでいる。

ちなみに、正義とは犬猿の仲である。

……で、今まで何をしていたかと言うと、簡単に言えば書類整理だ。

この学園の生徒会は、神代市の他の高校の生徒会と比べても段違いなほどに激務である。それはもう、引退した執行部員を引つ張つてきて何とか仕事が回るくらいに。

それは主に、ある特定の部活のせいであつたり、ある特定の人物のせいであつたり。それを差し引いても、個性派揃いの部活や問題児のせいで、下手な運動部より体力が付いてしまう程に目粉るしい日々を送っている。

例えるならば、一年生の書記が野球部に殴りこみに行かなければいけないくらい、その仕事は大変なのだ。例え話じゃなくて実話だよ、クソツタレ。……ああ、嫌なこと思い出した。

そんなこんなで、一つ片付けた傍から転がり込んでくる厄介事に対応していると、自然とおざなりになってしまつのが書類仕事な訳で。

溜まる一方で、消える気配の全く無い書類の山。頭を抱えた誠が、申し訳なさそうに手伝ってくれと救援要請を出してきたのが昨日の話。

部外者が手を出していいものかとも思うが、その辺りは我らが生徒会長様の裁量一つである。素晴らしきかな、私立学園。金の出る行く教師より、金を振り込んでくれる生徒の方が強い訳で。その頂点に立つ生徒会長様の権力は絶大だとかそういうお話。

ただ、手伝うとはいっても、そこはさすが我らが学園の治安維持部隊ヨロシク生徒会は優秀だった。

一見乱雑に詰まれた書類の山だったが、ある程度には整理されていて、やることは纏めて棚に仕舞うだけの仕事だった。

今回のように誠から頼まれる事は何度もあつたし、一年間は書記として生徒会に在籍していて、ある程度の要領が分かっていたこともあつて、本腰を入れればそう大した時間も掛からずに片付けることが出来た。そして、その本腰を入れてやるだけの時間すら取れない生徒会の元同僚に合唱した。アーメン。辞めてよかつたなとか何とか。

パイプ椅子に腰を下ろして、誠から差し出されたお茶を啜りながら、軽い疲れとくだらない考えを溜息とともに口から吐き出す。

「いやあ、やっとこさ終わったか。二人ともお疲れさん。」

そしてこの一言である。

学園三階の生徒会室で我が物顔でパイプ椅子に踏ん返り返る正義は、手伝うわけでも何をするわけでもなく、忙しく書類整理をする俺たちをつまらなさそうに見ていただけだった。何で来たんだこいつ。

見ているだけなら良かった。だが、仕事が終わった途端にこれである。ジーザス、勘弁してくれ。

おかげで、彼女の分のお茶を注いでいた誠が、その魅力的な顔を般若の様に歪ませている。おお、怖い。だからつれて来たくなかったんだ、チクシヨウ。

「何にもしてない奴が、偉そうに口を開くなアホンダラ！ だいたいお前を呼んだ覚えは」

「相変わらずキツツいなあ、まこつつあん。そんなおつかねえ顔で睨んでくれるなよ、せつかくの美人が台無しだ。仲良くしようぜパーシー君。」

「！！！」

「ほつとけよ、構って貰えなくて寂しがってるんだ。相手にするだけ無駄無駄。」

どうして誠は正義に対してだけ煽り耐性がゼロなのかとか何とか思いつつ、おどけた顔でからかう正義に食ってかかるうとした誠を嗜める。

違う。こういうのは俺の立ち位置じゃない。けどやらざるを得ないのだ。主に俺の心の平穩の為に。そして誠の手の中でミシミシと

悲鳴を上げる湯飲みの為に。

「それにしても、人手が足りないなんていったいどうしたんだよ。いや、いつも忙しいのは分かるけど、それでも常に2、3人はいるだろ？」

「いや、ちゃんと人員は確保していたんだ。昨日も4、5人で整理していたんだが……。」

「……今日はこの状態、と。何かあったの？」

上手い具合に話を逸らせた自分を自分で褒めてやりたい気分だ。感情無いけど。

とはいっても、疑問には思っていたことである。今まで手伝っていた時も、大抵は誰かが居たし。生徒会の人員を遊ばせて俺に手伝いをさせるなんて事は誠はしないし。そんな余裕もあるわけ無いし。というか、昨日も整理していたのか。成程、道理でそんなに時間が掛からず終わったはずだ。いやマテ。昨日？どうにも地雷臭がプンプンする。言葉を濁した誠を見るのが怖い。

「教学部の連中だ!!！」

机を勢いよく叩いて歯軋りする誠。

机が震えて、お茶が撥ねた。ああ、ゴッド。俺が何かしましたか。ええ、あなたを信じてしまいました。信じることは罪ですか。ああそうですか、くたばれチクショウ。

生徒会室は地雷原なんて今更な話だった。そういえば、昨日も学園の指名手配犯と戦争ごっこしてた気がする。正義と肉体言語で親睦を深め合っていたせいで、そんな出来事は綺麗サツパリ便所に流れていた。

「……あー、また才力研か。今度は何なの？」

「昨日、科学部で妙な実験をして爆発沙汰だ。科学部の部員が泣きついてきてな。今朝も私以外の手が空いている人員は、全て後処理を行っている。私も行きたかったが、この書類もあるしな。それに頼んでおいて、恭介一人にやらせるわけにもいかんだろう。」

「ぶははは、なるほど、昨日の放課後は騒がしかったわけだ！あいつ等毎度毎度愉快なことしてくれるじゃねえか！！」

ああ、頼むから余計なことと言わないでくれと、心底可笑しいと腹を抱えて笑う正義に目を向けるがもう遅かった。

頭を抱えた誠が、キツと正義を睨む。

「こつちは不快だ！！あの狂った眼鏡を筆頭に、教学部の奴らは碌な事をしでかさない！朝早くから夜遅くまで私の時間を奪うようなことばかりして あの狂人が！！」

「……！！」

「構わない構わない、白髪になるよ。」

売り言葉に買い言葉。ジーザス。俺の平穩は跡形も無く碎け散りましたとさ。

何がツボに入ったのか机をバンバンと叩いて笑う正義に、我慢できないとばかりに噛み付こうとする誠をなんとか引き止める。勘弁してくれ、俺が白髪になりそうだ。

「そうは言うけどな、恭介。私は生徒会室にこの馬鹿がいるだけ

で精神を侵されるような気分だよ。書類整理だけだと言った筈なんだが、何でこの役立たずを連れてきたんだ……。」

「尤もです。顔を顰める誠^{マコト}に苦笑せざるを得なかった。

「美しい友情さ、察してくれ。友達がいなくて寂しがつてる哀れな子犬を放っておけなかったんだ。……本当に何もしないと驚きだったけど。それにアレだ、好きな子にちょっかいを出したくなるのが男の子っていうだろ？ 誠^{マコト}が気になるお年頃なんだよ、正義は。」

「それは……ぞつとしないな。」

俺の言い訳がましい言い訳に、寒気がするとばかりに更に顔を顰めた誠は、気味の悪い物を見るような目で正義を見た。気持ちは分かる。

その冷ややかな視線を受けた正義は、おいおい、と両手を広げる。

「学園一のイケメンで人気者な俺を捕まえて随分なこと言ってくれるじゃないか。」

「それはそれは。みんな大好き人気者の正義君が、その貴重なお時間を使ってここにいてるってことはやっぱり……。」

「それ以上言うな！ 鳥肌が立ってきた……。」

「……だいたい、何も分からない俺が書類整理に手を出したところで、さらにしつちやかめつちやかになるだけじゃねえか。それとも何だ？ 手伝ったらその神聖なる領域豊かな胸にダイブさせてくれちゃったりするわけ？」

だからなぜ来た、とは誰も言わなかった。というか言っ
てはいけないことを言ってしまった。

俺と誠から弄られて面白くなさそうな顔をした正義が、誠のそこ
はかとなく大きな果実に指をさして鼻で笑った瞬間、スツと顔から
表情を消した誠がその場にあつた筆箱を正義に向かって投げつけた。
正義は飛んできた筆箱を難なく躲すと勢い良く立ち上がって、座
っていたパイプ椅子を蹴り飛ばし獰猛な笑みを浮かべると、立てた
親指を下に向けた。

アチャア、と俺が少し遊びすぎた事を後悔して目を覆っていた手
を元に戻した時には、2人は既に戦闘体制だった。ジーザス。だか
ら正義は連れてきたくなかつたんだとか何とか、ここに来る前の自
分の行動を本気で後悔したりしなかつたり。しばき倒しても止め
とくべきだった。

「っは。いいねえ、そうこなくっちゃ。いつになく好戦的
じゃねえか、え？クソぶちまけて地獄に落ちるか？」

「黙れ！今日という今日はお前のそのふざけた笑顔を引っぺがし
てやる！！ついでにその下品な口も針で縫ってやるうか!？」

キーンコーンカーンコーン。

「おい、予鈴鳴ったぞー!……って、聞いてないよな、うん。」

第もう何次か分からない生徒会室戦争を勃発させた二人に一応声
を掛けるが、当然聞いちゃいなかった。どうするんだコレ。

とはいっても、こうなってしまうたらやる事は決まっている訳で。
一気にお茶を飲み干し、自分専用の湯飲みを巻き込まれないよう

に棚に仕舞ってから、生徒会室からトンスラする。当たり前だ。俺知ーらない。

『ヒユウー！おいおい、そんなんじゃ当たらねえぞ？もつと気合い入れてこいよパーシーー！』

『その名前で呼ぶな！ゴキブリみたいにちょこまかちょこまかと……。止まれ！そこを動くな！口を開くな！笑顔を見せるなあああああー！』

過程はどうあれ、結果が見えている勝負に興味はない訳で。生徒会室から聞こえてくる騒がしい声に、まあどうせ勝つのは誠だろうなとか何とか思いながら教室へ急いだ。

案の定、勝ったのは誠のようだ。

右頬を赤く腫らし、ムスツとした表情で教室に入ってきた正義を見て、思わず苦笑した。

そもそも正義は妙に律儀で、つまり女である誠に手を出せないの、勝つことなど出来る筈がない。誠が、おちよくりながら逃げ回る正義を捕まえてポコポコにするという、始まる前から分かりきった勝負になるのは目に見えていた。

生徒会室はそれほど広い訳ではないので、逃げ回るにも限度がある訳で。恐らく俺が教室についた頃には勝負は付いていただろう。いい加減やめればいいのに。若干呆れながら、椅子に座る正義に声をかける。

「お疲れ。思ったより早く終わったじゃないか。負けるの分かってるんだから、いい加減誠をからかうの止めたらどうだ？アレで結構繊細なんだって、誠は。」

「……つたく、自分が蹴とばした椅子に躓いてすっ転んでちゃ世話ねえよな。おまけにパーシーの奴、結構本気で殴って来るから痛いなんのって。」

忠告をさらっと聞き流して正義は今回の敗因の愚痴を零す。コノヤロウ。

どつやら、止める気なんてさらさら無い様で。

「自業自得だ。学校の備品は大切にして教訓だな……っと。」

「はいはい。席に着け、喋るの止める。減点すつぞー。」

これから生徒会室に行くときは絶対にばれない様にしようとか何とか思いながら、いつもの調子で入ってきた国語教師の姿を見て、口を閉じた。

これは、そんな日常の一片。

「すまん恭介、朝手伝つて貰ったばかりなのに……。」

「いや、まあ。そりゃそうなるよなあ……。」

申し訳なさそうに謝る誠に、俺は溜息とともに気の抜けたような言葉を返す事しか出来なかった。

放課後、隣のクラスからやってきた誠に頼まれて訪れた生徒会室。たまたま手の空いていた数人の執行部員が、顔を曇らせながら朝よりもごちゃごちゃとしているその場所の後片付けをしていた。そりゃそうだ。入ってみれば大惨事。俺でこうなのだから彼らからしてみれば発狂ものだろう。

「待て！待ってくれ！！新発売のCDが俺を呼んでるんだあああああ！！」

本当は面倒臭かったので逃げ出したかったのだが、原因の一端は俺にもあるので断ることも出来ず。そして今回ばかりは、その原因の大部分である馬鹿を生徒会室に引きずり込んで、一緒に後始末を行った。

決めた。もう決めた。こいつは金輪際生徒会室立ち入り禁止だ。どうせ明日になれば忘れるだろうけどな、クソツタレ。

片付けながらそんなことを考えて。片付けてる途中に割れた自分の湯飲みを見つけてしまつて。

ジーザス。何だつていうんだチクシヨウ。とか何とか思っている内に、割れた相棒はゴミ箱に捨てられて。

ああ、本当に世の中クソツタレだ。

……ほら、そんなに面白くも無い話だろ？でも、オレはそれで幸せだったんだ。

オレと、正義と、誠と。正義の親父さんと、お袋さんと。椎名ちやんと、そのオマケと。後は、偶に沸いてくる変な奴と。

それだけ。たったそれだけだ。たったそれだけでオレの日常は、オレの世界は回っていたんだ。

それで良かった。それが全てだった。それ以外何もいらなかった。

それを、この奴らは手前勝手な理由でぶち壊したんだ。だったらさ、別にオレが手前勝手な理由で奴らの全てをぶち壊したところで、何ら問題が無い訳だ。

……ああ、分かってるよ。割り切って生きている人も居る。こんな得体の知れないところで、必死に生きている人も居る。けどね、オレはそうじゃなかった。ただ、それだけの話なんだよ。』

10/20 (前書き)

2300PV500ユニーク有り難う御座います。どうもタムラカエデです。

今回は視点を何度か切り替えてお送りしております。見辛かったですら申し訳ないです。

あと、ちよつとばかり詰め込みすぎたかななんて思ったり。話が繋がるように書いているつもりですが、ちんぷんかんぷんだったらすみません。

文句は謹んで便所にゲフンゲフン、話はおいおいと展開していきます。

ではどうぞ。

自分は、集落の他の子供たちよりも劣っていた。

どれだけ訓練したって、鍛えたって、追いつく頃にはもっと先へ行っていった。

自分が幼かったからとか、少し体が弱かったとか。そう言うのを言い訳にしたくなかった……と思う。

長の子供である自分が他と比べて勝らないのはよくても、劣っているのは恥ずかしかったし、両親に申し訳なかった。

『気にすることあ無い。追いつく必要もなければ追い越す必要もねえんだよ。』

父親はよくそう言って励ましてくれたが、その度になんだか惨めな気分になった。

だから、一人で訓練するようになった。

訓練の際、他の子供たちが自分にペースを合わせてくれるのが悔しかったのもある。

訓練を見る大人たちや父親が、内心失望しているのだろうなと思つと、顔を合わせる事が出来なかったのも理由の一つだろう。

いつの間にか、自分は集落の外れの森で死体を相手に訓練するようになっていった。

集落に侵入しようとして命を落としたり、物言わぬ死体。どの様にすれば、この腕を切りやすいのだろう。どの様にすれば、この脚を折りやすいのだろう。どの様にすれば、効率的にばらばらにできるのだろう。幼い頭で考えながら、毎日毎日訓練した。

死体を生きている人間に見立てて、狩りの練習もした。今日は、このルートで背後から回り込んで首を刎ねてみようか。この木を足場に飛んで、脳天から串刺しにしてみようか。静かに近づいて、脚の腱から切ってみようか。子供ながらにイメージを思い浮かべ、日々死体と戯れた。

何時頃からだろうか。

そんな毎日を過ごしていたら、いつの間にか死体を”消せる”ようになっていた。

切っ掛けは、もっどの部分かわからない使い道の無くなったソレ。放っておけば森の獣が持つて行ってくれるが、その日は何だか目障りだったので自分で如何にかしようと思った。

このぐらいにバラバラにしたら大丈夫だろう、と思いつく限りのイメージで細切れにしようとしてソレにナイフを通したら、刃が通った瞬間に跡形もなく消えてしまった。

驚いて、すぐに他のソレにも刃を通したが出来なかった。

何が違ったのだろうかと思っって、もしかしてイメージが大事なのかなと思っ、最初のように思いつく限りのバラバラになったソレを思い浮かべて試してみると、消す事ができた。

同じ要領で何度も他のいらぬソレに試してみたら、同じ様に何度も消す事が出来た。

どのくらいの大きさまで消せるのだろうかと思ひ、どんどん対象を大きくしながら試していった。

少し勿体ないと思つたが、まだ使つてない死体も、頑張つてイメージして刃を通したら消す事が可能だつた。

他の人も同じような事が出来るのだろうか。

もしそうなら、全てにおいて劣っている自分が初めて他の人と同じ位置に立てた事になる。

そう思うと、とても嬉しかった。

その日の晩、さつそく父親にその事を尋ねてみた。

答えは、否だつた。

そんな事できる筈がない。何を馬鹿なことを、と相手にしてくない父親。

その事が悲しくてむきになつた自分は、そんなはずない、と今日の事を父親に伝えた。

父親は訝しむ様な目で自分を見て 明日見せてみる、と言つた。

翌日になつて、自分は急ぐような足取りでいつもの場所へ向かつた。

少し遅れて、何故か苦笑した父親がやって来た。

さつそく自分は、確保していた死体に刃を通した。

もしかしたら昨日の事は夢だつたのかもしれない、と思つて不安になつたがそんなことはなく、ちゃんと昨日の様に消す事が出来た。

自分の言つた事は本当だつただろう、と父親の方を振り向く。

並大抵のことでは動じない父親にしては、珍しく驚いたような顔をして その後難しい顔で死体のあつた場所を睨んだ。

もしかして自分はとても悪い事をしてしまったのではないか。

不安になった自分は、恐る恐る父親の顔色を覗いてみる。
暫く難しい顔をしていた父親は、ふと気付いた様に自分を見ると
凄いぞ、と可笑しな笑顔で自分の頭を撫でて褒めてくれた。

嬉しかった。父親に褒められたのは、初めてウサギを狩ることが
できた時以来だったから。

その事が嬉しくて。誰にも出来ない事が出来るのが嬉しくて、そ
の後も毎日死体を消した。

何時もの様に訓練し、使った死体はその日に消した。

そのうちに、消そうと思って刃を通すだけで消す事が出来るよう
になった。

そう何度も集落は襲撃されないので、死体が足りなくなることも
あったが、その時は獣の死体で代用した。

消せるのは死体限定だったが、そんな事はどうでもよかった。
朝早くから夜遅くまで、飽きもせず毎日集落の外れの森に入り
浸った。

だからだろう。

そんなくだらない事に夢中になっていたから 気付いた時には
手遅れだった。

そんな、夢を見た。

『YO!明日なんか来ねえ!(yeah!)昨日なんかいらねえ
!!(yaaaaah!!)』

目が覚めると同時に、恭介は飛び撥ねるように体を起こした。

荒く息を吐きながら恭介は自分の体を見て、その酷い寝汗に目を細める。そして苦しそうに自分の寝間着のボタンを外し、掛け布団を足でベッドの端に追いやった。

『そこにあるのは何時だつてtoday!老若男女every day today!!(Fooooo!!)』

しかしそれで気分が晴れることは無く。恭介は苛立ちを押さえるように胸に手をやる。

激しく脈打つ心臓。整えられない乱れた呼吸。霞む視界。ざわつく胸。恭介はその理由を考えようとして 止めた。

そんなものは無い、と。そんなものは気のせいだ、と。まだ始まってもない自分がこのような感情を抱くはずが無い、と。恭介は自分に言い聞かせるように、胸を押さえる手に力を込めた。

思い違いを正そうとして。モヤモヤとした気持ちも落ち着かせようとして だがしかし、恭介はそのような考えに至った自らの思考回路を心の内で罵倒した。

元より、自分には落ち着かせるべき感情など無い、と。黒く渦巻く胸中を吐露する代わりに、恭介は握り締めた拳をベッドに叩き付ける。軋む様な音を立てるベッド。鈍い痛みに襲われる拳。自身の取った馬鹿馬鹿しい行動に、恭介は頭に手をやり小さく息を吐いた。

『今日も今日とて今日で今日!昨日は今日で明日も今日!!(today!today!today!today!)』

薄い壁から漏れた曲が、恭介の心中を嘲笑うかのように響く。

恭介は軽く頭を押さえて何時もの様に壁に投げつけるために時計を探すが、枕元にあるはずのそれはどこにも無い。恭介は思わず眉根に皺を寄せて周囲を見渡した。

『そう、生き残るべきは今！考えるべきはnow！！y e e a a a a a！！！！』

果たして時計は、何時もの壁の下に転がっていた。

いつの間にか投げでいたのだろうか、と思いながら、恭介はベッドから出ておぼつかない足取りで壁まで歩く。時計を拾いベツトまで放り投げた後、彼はそのまま思いつき壁を蹴り飛ばした。

『偉い人が言わねえなら、俺たちが言っでやる！少年よ、今を生き延びろ！！』

いつかこの壁壊れるんじゃないだろうか。恭介は一瞬脳裏を過ぎったどうでもいい考えを頭を振って忘れ、そのまま汗を流すために風呂場に向かった。

「……………さあ、夜没恭介を始めよう。」

目を追うことにはつきりとしていく夢。

シャワーと共に頬を流れる温かいものに気づく事が出来なかった恭介は、その日の朝、何時もの様にうまく笑顔を張り付ける事が出来なかった。

俺には、感情が無い。何があるうが、感じ入ることも無く、故に表情も変わることが無く。

けれど、一度始まりの合図を口にすれば、幼馴染である親友の真似をして感情があるように振舞うことが出来る訳で。何かを感じ、それを表に出すことが出来る訳で。

その親友は、ちよつと変わってはいるが人並みで。ならばそれを真似る俺も人並みで。多分。

キーンコーンカーンコーン。

つまり、学校が好きすぎて帰るのが辛いという特殊な性格では無いので、本日最後の授業、6限目の終了を知らせるチャイムを聞けば、自然と頬が緩まってしまうという芸当も朝飯前なのであって、とか何とか。

気の抜けたようなチャイムの音と共に、その日の授業を全て終えた学生たちが慌ただしく下校や部活の準備を行う。俺や正義の所属する3 Aもその例に漏れず、騒がしい空気に包まれた。

今日はどこへ行くのか。部活面倒臭いな。などとお喋りに花を咲かせるお気楽なクラスメイト達を視界の片隅に映しながら、授業が終わった開放感を感じつつ、俺も帰るために荷物をまとめていた。

「……それで？ 一体全体どうしちゃったんだ？」

さよならは突然に。そんな開放感も、後ろの席の正義から声を掛けられたことにより便所へと流れる。

質問の意図が分からない。というか逆に、どうしたと聞くお前にどうしたと問いたい気分だ。

とか何とか思いながら、荷物をまとめる手を休めて振り向く。

何なんだよ藪から棒に。今現在の状態を言っているのなら、お前の質問の意味が分からなくて困ってる、とでも答えておこうか。」

「……だからよ、お前最近なんか元気ないんじゃないの？何か悩み事でもあるのかと思っただが。」

振り向いた先の正義は、柄にも無く心配そうにその赤茶の髪を掻いていた。そのまま禿げる。超禿げる。

とはいっても、心配されたところで特に思い当たる節があるわけでも無く。しいて言うならば、俺は正義を真似ているので、俺に何かある時は、正義にも何かある訳で。まさに一心同体、熱い友情。素晴らしいね。そんなわけあるかチクショウ。俺は金魚の糞か、気持ち悪い。

あくまで真似ているのは、喜怒哀楽の感情とか言動な訳であって。別にその時その時の正義をコピーしているとかそういう訳では無いのである。というか、そんな事が出来たら脱糞するほど驚きだ。俺は別に超能力者でも何でも無い訳で。つまり、正義の何時に無く珍しい表情に、全く心当たりが無かった。

何を根拠に。ご覧の通り夜没恭介は、今日も何事もなく絶賛営業中で御座います。……閉店間近だけだな。」

無駄に心配されても鬱陶しいだけなので、とりあえず釘を刺しておく事も忘れない。

「……おいおい、夜没恭介検定1級の俺様の目は誤魔化せねえぞ。ほれほれ、何があったか親友に言ってみなさい。このどでかい器で受け入れてやるう。ん？」

両手を広げて、カモーンとふざけた事を抜かす正義。

「ただどふざけた口調とは裏腹に、心配そうな表情は依然として変わらなくて。何か悪いものでも拾って食べたのだろうか。オーケー、出来ればそのままくたばれ。」

「まあ、昔から正義は思い込みが激しいというか、こうと決めたら譲らないところがあつた。俺や椎名ちゃんもそんな正義に振り回された事が多々あつて、今回もそんな所だろうと辟易してしまうとか何とか。」

「こういう場合は何を言っても無駄なのが世の常なので、とつと話を切り替えることにした。三十六計逃げては転びというやつだ。ジーザス、人間諦めが肝心なのです。」

「何なんだそのふざけた検定は。それよりこの後はどうするんだ？昨日買いそびれたCD買いに行くんじゃないのかよ。」

「逃げんじゃねえよ。」

「少し怒ったように正義が言うが、それはこっちの台詞だチクシヨウ。御託はいいからその訳の分からない検定の詳細を吐け。吐いてくださいお願いします。」

「この世で一番怖いものは何か？それは、自分の知らないところで行われている自分の検定。そしてその世にも恐ろしい検定の1級保持者が目の前に現れた時は、どのように対応すればいいのか。答えはいたって簡単。しばき倒して肥溜めにぶち込む、だ。」

つまり、グダグダ抜かさないで早く帰る準備をしろクソツタレ、

という事である。

「というのも、今日は放課後正義に付き合っただけCDショップに行かなければならない訳で。」

本当は昨日買いに行く予定だったが、生徒会室の後始末に俺が無理やり引き摺っていったせいで買えなかったとか何とか。

自業自得なので知った事じゃないのだが、ネチネチとその事をつついてきた正義にうんざりして、放課後に一緒についていってやるよと失言してしまったのが今朝の話。

何がだ。別に付き合わなくていいんなら俺は帰るぞ。あのふざけた歌のレパトリーが増えないのは、俺にとっては嬉しい限りだ。いや、本当に。」

少し苛々したように言葉を放ってしまうのにも、これまた理由があつて。

正義のイカれたバンドに対する思い入れは半端では無い。尾崎豊のCDとマルポロをゾッキの墓にお供えするみたく、そのイカれたバンドのCDとマイルドセブンを正義の墓前に供えないと末代まで呪われてしまうくらいに、彼のそのグループに対する愛情は凄まじいのだ。それはもう、未来のコイツの嫁さんが嫉妬して、最悪コナン君の手を頼るような事件を起こしてしまいうまくないに。多分。

というか、俺はそれこそ毎日の様にそのグループを貶したりしているのだが、もし俺以外の奴がそんな真似をすれば最後、ただでは済まないだろう。

例えば、先週街に繰り出して遊んでいた時に、今も着ているお気に入りのバンドのロゴがプリントされたシャツを馬鹿にした命知らずが居たのだが、ぶち切れた正義がボッコボコにしてあえなく昇天なされた、とかそういう事もしばしばあつて。おお、怖、思い出し

たら寒気がしてきた。よく今まで無事だったな俺。というか、何故俺はいいんだろうか。とか何とか、居もしないカミサマに感謝して、だがしかしこの状況を天から笑って見ているのだろうかと思うと、そんな感謝は彼方に消えて。

これがどう話に繋がるかというのと、つまり発売日から一日お預けを食らった正義は何としても今日中にはCDを手に入れたい訳で。もし何時もの音楽店に無かったとするならば、榊ヶ丘全体を。榊ヶ丘に無ければ、隣の若松町を。若松に無ければ、更にその隣町を。最悪、神代市全体を這いずり回って虱潰しに探すだろう。矛盾してるが、それが例え明日になると正義はCDを手に入れるまで探し続ける筈だ。要するに時間が無いんだよバカヤロウ。

まあ、それほど人気のあるグループとも思えないので、発売日即日完売ということは滅多に無いだろうが、その滅多なことがあつては困るし、前に昔の限定版のCDを買うのに一日中連れ回された事もあつて、主に俺の睡眠時間の為にもとつと買いに行きたいというのが本音であつたり無かつたり。

仮に、最後の一枚を目の前で他のやつに掻つ攫われて発狂するなんてことになれば目も当てられない。こんな事を考えている暇も、正義の戯言に構っている暇も無いのである。

「……………一昨日から少し調子がおかしいだろうが。夢見が悪かつたとか言っていたが、それが何か関係あるんじゃないのか？頼むから話してくれよ恭介。お前が気付いてんのか知らねえけど、今日の朝もうまく笑顔作れてなかつたぞ。」

だというのにこの馬鹿は、俺滅茶苦茶心配してるんです、といった顔から一転して真顔にまでなりやがって。普段の便所に流してしまいたい程の汚い言葉では無く、真摯な言葉を口にして。だが、成

績優秀、中身はスツカラカンの馬鹿に真顔で心配される程馬鹿な話
は無い訳で。ああ、つまり馬鹿にしてるんだなこのボケナスは。

「というか、俺そんなこと言っただけ？いや言っただけ。そもそも
夢なんて見ていない。まあ仮に、あくまで仮にだが、俺がそんな事
口走ってしまったとしても、だ。」

「大きなお世話だ。よくもまあそんな太古の昔の出来事を覚えて
いるな。そもそも俺がどんな夢を見ようが、お前に関係」

「関係無いなんて言ったら、殴り飛ばすぞ恭介。普段お前
がどんな夢を見ようが関係ないがな、それがてめえのその剥いでも
剥がれねえ薄っぺらい笑顔を引っぺがすぐらいの事なら話は別なん
だよ！」

そんな素っ気無い態度が癪に障ったのが、正義が俺の胸ぐらを掴
んで声を荒げる。

オーケー、落ち着こうか兄弟。これ以上ケツの穴掘られなくな
かったらさっさとその猿の手にも劣る小汚い手を離すんだな。

ほら見る、不穏な空気を感じた何人かの薄情なクラスメイト達は
そそくさと教室から出て行った。残ったクラスメイトも、普段仲の
良い二人がどうした、と何時もとは少しばかり異なる事態の成り行
きを見守っているじゃないか。有難いね、チクシヨウ。つまり、ら
しくないんだよこの状況は。

口を開けば、クソツタレ、くたばれ。虫の居所が悪ければ、手を
出すか足を出すか。肩並べて歩けば、ゲロ吐かせるか、クソ捻り出
させるか。とてもじゃないが、一家団欒の食卓、お茶の間になんか
差し出すことが出来ないくらい、汚い関係の筈だ。水に流したとこ
ろで、こびり付いて落ちることの無いクソの様な関係の筈だ。お涙
頂戴、胸が熱くなる青春の1ページ、なんていうのは俺たちには縁

が無いんだ。

何を勘違いしているかは知らないが、こんな状況でも素敵に爽やかな作り物の笑顔を貼り付けている俺に対して、お前が口から垂れろべき言葉はただ一つ。『何時までその気持ちわりいツラしてやがるんだ。クソぶちまけて地獄に落ちろ。』これ以外に無いんだよ。だから、その顔を、止める。

確かに、お前は親友だ。俺に感情なんてモノを教えてくれた、大切な幼馴染だよ。お前のおかげで今の俺がある。大袈裟だが、俺の世界であると言ってもいい。

けど、あくまでお前の親友は『夜没恭介』だ。朝、メツキの剥げたドアノブに手を掛けた瞬間から、夜、その立て付けの悪いドアを潜り終える瞬間まで、気持ちの悪い狂った笑顔を振りまいている『夜没恭介』だ。分かるか？つまり、お前のソレは、お前が入ってきやすい場所じゃないんだよ。俺にとって全てがその他大勢になるその場所は、お前の領分じゃないんだ。だから、いい加減、その胸糞悪い顔を、止める。

そんな内心をぶちまけたかった。けど言ったところで逃がしてもらえるような雰囲気では無く。だがしかし、そんな考えを抱く程に俺は頭に来ていて。

結局、構っていられるかとばかりに胸ぐらを掴んでいる手を払いのけ、

「感動的な台詞をありがとう正義君。その涙あふれる言葉は、お前に気がある女子に言ってやれ。はっきりと言うが、お前に関係ある事が、俺には関係ない。それと……ああ、残念。只今を持って、『夜没恭介』は閉店いたしました。用があるなら一昨日来い。」

そして、無理やり終わらせた。まあ、明日になればまた何時も通

りだろう、とそんなことを願いつつ、もう終わりを迎えた、感情の無い俺が何を願うのかと自嘲する。自嘲するだけの感情があることにも気付かずに……これが逃げであることにも気付かずに。どうでもいい事だ、と表情と共にそんな考えもゴミ箱に捨てる。

「……そうかい。お前がそういつつもりなら、俺はもう何も言わねえよ。」

「そりゃ結構。」

親友に向かって吐き捨てた言葉に罪悪感を抱くことも無く。教室の入り口へと向かう俺を、払いのけられた手をそのままに苦い顔で見送る正義に、爽快な気分を感じることも無く。

こりやまずい事になったぞと、成り行きを見守っていた気のいいクラスメイトたちが頭を悩ませているのも、別にどうでもよくて

「ごめん！お兄ちゃん待った……きゃ！？先輩！？」

突然目の前に現れて、驚きの声を上げる椎名ちゃんの事もまた、どうでもよかった……筈だった。

険悪だったその場の雰囲気が一気に霧散する。

クラスメイトたちが声の主へと視線を向けると、そこにはあたふたとしている小柄な少女。

少女 椎名は、入り口のドアを開けた瞬間に突然現れた無表情

の恭介に驚きつつ　恭介から見たら突然椎名が現れたのだが、恭介の後ろで突っ立っている兄の姿を見つけると安堵の表情を浮かべ、元気に声をかけた。

「お兄ちゃん、ごめん、委員会があるの忘れてた！遅くなるから、買い物には先輩と一緒に引っついて！！それじゃ、ごめんね！先輩も、お兄ちゃんを宜しくお願いします！！」

そしてそれだけ言うと、椎名はその場から慌てたように走り去って行った。

その場にいた全員がポカーンした表情で椎名を見送る中、我に返ったクラスメイトが空気を読んで口を開く。

「相変わらず椎名ちゃん可愛いよなあ。九翔が羨ましいよ。」

「いやあ、俺も一回でいいから椎名ちゃんにせ・ん・ぱ・いって呼ばれてみたいなあ。恭介だけ羨ましいっての。」

「俺らには恥ずかしくて口開いてくれねえもんな。しっかし元気な子だよな……その小柄な体格に似合わない実った果実もまたよし。」

「ありゃあ将来とんでもない事になるぞ。正義……いや、義兄さん！ここに優良物件があるんだけど椎名ちゃんにどうだい？」

一人、また一人と場を和ませようと口を開いていき、そんなクラスメイト達の言葉に気を持ち直した正義は、冗談言つなと言葉を返した。

「そうだろう、そうだろう。自慢の妹だからな。お前らにはもっ

たいなくてやれねえなあ。それに、椎名の相手は恭介しか認めん。」

「何てこと言っちゃってくれるのかなコイツは。椎名ちゃんのことも考えてやれよ。」

突然会話に名前を挙げられた恭介が、思わず言葉を返してしまう。

「ちえ、なんだもう御手付き状態かよ。正義様の気が変わるのを待ちましようかね。」

そのまま無視して帰ってしまうかと思われたが、一応言葉を返したのだ。なら、こりゃもう大丈夫だろうと感じたクラスメイトが会話を締め括った。

「いつまでたつたつて変わんねえよバカチン。……んー、俺としてはちゃんと椎名の事を考えてるつもりなんだけどなあ。それで閉店しちゃった恭介君は、妹に見捨てられた哀れな正義君を置いて帰っちゃうのかな？」

そんなクラスメイトに軽く言葉を返した後、正義はニヤリと笑い恭介の様子を窺う。そこに先程の様な雰囲気など全く無く。ならば、と恭介は小さく何かを呟いた後、降参だとも言うように両手を上げた。

「……オーケー。臨時開店だバカヤロウ。」

そしてやっと、恭介と正義はお互いに向かい合って笑った。

一件落着、と大きく安堵の溜息を吐いたクラスメイトは、切っ掛けをくれた椎名に心の中でサムズアップを送りながら、教室を出ていく二人に仲裁の報酬をせびる。

「おーい、明日ジュースの一本くらい奢れよー。」

「はいよ、ご注文はご覧の宛先までドシドシどうぞ。……ったく、友達思いのクラスメイトを持って幸せだよチクショウ。」

「っは、違いねえ。」

気のいいクラスメイト達のいる教室を後にして、二人は苦笑しながら歩みを進める。

「ちなみに聞くけど……その変な検定一級って誰がいるの？」

「俺だけだ。まこつつぁんと椎名が二級だな。」

「誰が試験官なんだよ……。」

「勿論俺だ。」

「……さいですか。」

そんな他愛も無い会話をしながら、何時もの様に肩を並べて街へと向かった。とても自然な、穏やかな笑みを浮かべながら。

「いやあ、売り切れてなくてよかったよかった。もしかしたら他の街まで買いに行かねえといけねえかなと思っただぜ。」

お目当ての物が買えてホクホク顔の正義とは対照的に、俺はげんなりとするしかありませんでしたとき。

何故なら、本当の勝負はここからな訳で。寮に戻ったら、絶対にコイツは近所迷惑を考えずに朝の様な大音量で聞くだろう。それはもう、この世に絶対なんて言葉が無いのは絶対だ、という言葉が覆す程に絶対確実に。

「そりゃよう御座んした。……頼むから、夜中にそいつをコンボで聞いてくれるなよ。我慢できないなら、CDプレイヤーでイヤホンして聞いてくれ。」

故に今ここで、俺も殺せる程のドデカイ釘を刺しておかないといけない訳で。俺の安眠の為に。

「おいおい、そりゃねえぜ！！頼むよ、今晚はマイコンボでこいつの大鑑賞会って決めてるんだ！！」

ジーザス、そら見たことか。たまったもんじゃない。

どうしようもない駄目兄貴に強く言うことが出来ずに夜な夜なすすり泣いているであろう椎名ちゃんのことを思うと、この世の終わりだと顔を青くする正義には悪いが追撃せねばなるまい。

「迷惑だ！安眠妨害も良い所だぞクソツタレ！！言っておくがな、お前の隣の部屋が俺や椎名ちゃんじゃなかったら、一週間もしないうちに寮追い出されてるぞクソ野郎！！……椎名ちゃんも何で我慢できるんだ。」

「椎名は寝るときは耳栓着用だから問題無い。」

「お前、それ兄貴としてどうかと思うんだが。」

初耳だぞオイ。今まで知らなかったとんでもない事実には脱糞するほど驚いた。ついでに頭も痛い。

ゴツド、天は我等を見捨てたのですか、そうですか。期待なんか一欠片もして無かったよ、くたばれチクシヨウ。というか、妹にそんな真似させて全く悪びれない兄貴ってというのはどうなんだ。

「なんだ、恭介。寝られないならDVDでも貸してやろうか？スプラッタ戦隊シヨッキンゲレンジャーと仮面ライダーバイオレンスの全巻貸してやるよ。」

「いらん!!」

そしてこのありがた迷惑。ふざけんな。一度でいいから、コイツの衝撃的で暴力的な頭の中身を見てみたい。切実に。脳みそしかねーよバカヤロウ。

というか、規制の厳しいこの平成のご時勢で、子供たちの夢の間にそんなもの放映してるのか。世のお父さんお母さんの目を剥く姿が目につかぶ。浮かぶだけだが。

ちなみに、どうせ借りるならカクレンジャーかガオレンジャー、クウガかアギトがいいとか何とか。閑話休題。

「というかお前、ヒーローは辞めたんじゃないのかよ。嫌いになつたとか言っただけじゃなかったか？なんでだったか忘れたけどさ。」

精神的に疲れてきたので、とつと話題転換。というより、まだ正義が特撮ものを見ていた事に素直に驚いた。いい年こいて見ていいのかよとかそういう話では無い。

まだ俺や正義が小さい頃、正義にはヒーロー願望があった。それ

はもう猛烈に。口を開けばヒーローだの、正義の味方だの言っていた気がする。名前の由来からくるものもあつたのだろうが、そこはやっぱり世間一般様の男の子である以上、憧れずにはいられなかったのだろう。そして世間一般様の枠から少しばかり外れていた俺にはそんな願望が無く、むしろ正義を馬鹿にしていたのでよく突つかかられた記憶がある。

それが何をトチ狂ったのか、番組の時間になるとテレビに齧り付く様にしていて見ていた正義が、何時の日からか突然こんな嫌いだとか言つて見なくなつたので、てっきりそれ以降もずっと見ていないものだと思つていた。当時は日曜日の7時30分を過ぎても起きてこない正義を見る度に、今日で世界が終わるのかと思つていたとか何とか。つまり俺はそれなりの年まではちゃんと見ていましたとき。一応男の子だし。

「おう、嫌いだ。もう俺はヒーローなんかになねえって分かつてるし、なりたくもねえ。」

そりゃそうだ。ここでありたいとか言われても、それはそれでどうなんだろうかと思つたり。

「……だけどよ、やっぱり憧れつてのはあるんだよ。テレビ見てつとき、思うんだよ。人を助けるためだとか言つて好き勝手暴れまわつて、その被害でどれだけの人が迷惑してるか気にしちやいねえ。カッコよく巨大ロボに乗つて戦闘したところで、建物ボコス力ぶつ壊して、その足元できつと何人も人が死んでるんだ。」

それはまあ、そこはテレビだし子供向けだしとしか言いようが無いが、正義はそれ以外のことも含めて言っているのだろう。多分。世界情勢のニュースを見て苦い顔でばやいていた事もあつたので、現実問題も絡めて一緒に考えているのだろうか、とか。なんともま

あ、スケールの大きい話ではあるが。

「だけど……だけだよ、それでも、人を助けてるんだ。感謝されてるんだよ。迷惑極まりない自称ヒーローに笑顔で感謝してる人たちを見るとさ……なんかなあ、やっぱり憧れちまうんだよなあ。おかしいか？」

「理解はできないけど、否定もしないよ。嫌いなのに憧れるってのはなかなか無いぞ。」

どこか遠い眼をして話す正義に思わず苦笑した。

なんだかんだ言っても、結局憧れてるんじゃないか。大人に成りきれない子供みたいなものか、とか。要は馬鹿なのである。良い意味で、だが。これだけ真剣に考えて憧れる正義を見れば、番組制作者も涙を流して喜ぶだろうとか何とか。これが他の奴だったら、高校三年にもなつて馬鹿じゃないのかと頭の中身を疑うところだが、正義はそれでいいと思った。

ちよつとしたカミングアウトに正義に対する認識を少し改め、良い機会なので常々疑問に思っていた事を尋ねてみる。

「……お前の趣味の悪い音楽も、そんな感じの理由があるのか？」

「やっぱりあれ嫌いか？」

「いつも言ってるが嫌いだ。適当に日本語と英語をくつつけただけの歌詞に、あの叫んでるだけの様な歌い方が気に入らない。」

この際だからはっきり言ってしまうおう。もしかするともしかするかもしれないし。

「俺も最初はそうだったよ。いや、嫌いっつうかどうでもよかった。店にいる時にこのグループの曲が耳に入ってくると、なんだこれ、くっただらねえ歌って思う程度だった。」

「へえ……。」

俺のきっぱりとした否定に苦笑いしながら答える正義。

その意外な事実になんて驚いた。正義のことなのでつきり、何かこの歌馬鹿げてるから面白い、みたいな理由だと思っていたからだ。

「切っ掛けは……そうだな。友達がデートが破算になったってこのグループのライブのチケットをくれて、一緒に見に行った時だった。別にどうでもよかったけど、暇つぶし程度にはなるかと思ってた。だけどいざ見に行ったらさ……衝撃的だったよ。なんつーかな、月並みだけど、心に響いたんだ。お前の言う通り、適当に日本語と英語をくつつけただけの歌。それをさ、あのグループは必死になって歌ってた。何かを伝えたくて、歌詞だけじゃ伝えきれない想いを何とかして伝えようとして、叫んでいた。ああ、そうだな。ありゃもう歌じゃなくて叫び声だ。……でも、グツとくるものがあった。元気を貰ったような気がしたんだ。」

「……………」

その友達今すぐ連れて来い。三回回って土下座させた後、東京タワーの天辺からヒモ無しバンジーさせてやる。もちろん足にはブロック縛り付けて、落下地点には肥溜め置いて。とか何とか、その素晴らしきご友人への感謝のプレゼントを思い浮かべながら黙って聞く。

きつとその時の状況を思い出しているのだろう。先程と同じよう

に遠くを見るような眼をした正義は、温かい笑みを浮かべていた。その笑みがどうしようもなく眩しくて、そんな笑みが自然と出る正義が少し羨ましかった。

「そんでな、ライブの帰りにCD買って聞いてみたんだよ。普段、何気ない所で耳に入る曲。けど、このグループが歌っているところを想像したらライブの時と同じような気持ちになれた。それからだっけな……毎朝こいつ聞くようになったのは。朝家を出る時や、なんか嫌な事があった時は必ず聞くようになった。お前のソレと同じだよ。俺の、一日を始めるための合図なんだこれは。」

「……そうか。」

話し終わってすつきりとしたのか、正義はそのまま軽く背伸びした。俺も特に言うべき事は無くなったので、そのまま夜空を視界に納めながら足を進める。

会話が、途切れた。

月明かりに照らされた、榊ヶ丘町の住宅街。

寮へと向かう規則的な足音だけが耳に入ってきて来る。会話が途切れても特に気まずい雰囲気は無く、寧ろそれは心地良い物だった。秋の夜風に身を包みながら、お互い無言で寮へと足を進める。

こういう事もあるだろう。

こんな綺麗な月の夜なんだから。少し肌寒くて思考回路も冷え気味だから。……だから、考えも無しに言葉がポロリと出てくることもあるだろう。

「 夢だ。」

「 夢だ。」

「 ん？」

特段話すことも無いので恭介とボケーっと歩いていると、ポツリと呟く様に恭介が口を開いた。

顔を向けた先の恭介は、少し困ったようなニヤケ面で、何か考えるようにほっそい目をさらに細めていた。

「 …… 一昨日からかな、夢を見るんだ。」

「 それは、どんな夢なのか聞いても良いのか？」

もう一度言っただってこたあ、独り言では無く俺に話しかけてるっつー事だろう。

親友を苦しめているかもしれない夢。クラスで聞いた時には拒絶された話題。明日明後日くらいまでは触れねえ方がいいなと思っていたが、どういふ心境の変化か恭介の方から話してくれるっつーんならそれに越したこたあねえ。慎重に、逃がさねえように聞き出していかねえとなあ。

「 昔の夢だ……と思う。」

「 ……昔？毎日見るのか？」

……昔、ね。どの程度昔かは知らねえが、コイツは思ってたより悪いかもしれねえなあ。

「多分小さかった頃の夢だろうな。記憶には無いけど、他人の子供の頃の夢なんて見れる筈もないから。……あまり、夢の内容は覚えていない。一昨日は、そんな夢を見た、という事だけ覚えていた。昨日は、断片的だったけど、何もかもが赤い夢だった。……今日は、何も出来なかった子供の自分が、何かする事が出来て、顔も分からないけど父親の様な人物に褒められて 何かが手遅れだった夢だった。」

「……………」

恭介が俯いてなけりや、一瞬顔顰めちまったのに気付かれちまっていただろう。

ヤッベーなあ。エライマズイかもしれねえぞこりや。何つつてもコイツは家族と居た時の事なんざ覚えちゃいねえんだからよ。家族と居た時どころじゃない。両親の顔も、仕事も、何で死んじまったのかも、ガキの頃の恭介自身も。大事な部分だけを全部忘れていやるっつーのによお……………。

まいったなあ。怪しい雲行きについ眉根に皺がよっちまう。けどそれを今コイツに悟らせる訳にもいかなかった。

「日に日に、はつきりしていくんだ。一昨日はこんな日もあるだろうと思っただけだったけど、もう三回も見た。多分明日も見る事になるんだろう。……怖いんだ。怖いんだよ正義。」

「……………恭介？」

ああ、チクシヨウ。軽い気持ちで事態を考えちまっていた自分の

馬鹿さ加減に、今更ながらに頭にくる。今何だった？怖えつつたのか？あの恭介が？嘘だろオイ、勘弁してくれよ。

段々声が震えていく恭介に柄にも無く驚いちまって、名前を呼ぶことぐらいしか出来ない。だが、んなことには構わずに恭介は話し続ける。

「怖いんだ……自分が自分じゃ無くなってしまつような気分なんだ。お前が学校で言った通りだよ。いつも張り付けているこの薄っぺらい笑顔も今日は何故か上手く出来なかった。朝、鏡を見た時驚いたよ……無表情な筈の顔が、今にも泣きそうな表情を浮かべていたんだ。笑えるよな、そもそも一昨日の時点で気付くべきだったんだ。苛々したんだ。なあ、正義分かるか？」まだ夜没恭介を始めていなかった”のに苛々したんだぜ？」

「……………」

確かに。確かに今日の朝、恭介は何時ものによけた嘘くせえ笑顔じゃなかった。何時も怒鳴ってばっかの教育指導のおっさんが頑張って無理やり作った笑顔みてえにおかしな顔してやがった。

ああ、チクシヨウ！やっぱ朝の時点で腹割って話しくべきだったんだ！怒ってようが、驚いてようが、何してようが、いっつもアホみてえにニヤニヤ笑ってるこいつの笑顔が朝っぱらから狂っていた時点で如何にかしくべきだったんだ！！

……如何にかつて、どうするんだよ。何て声掛けりゃいいんだ。なっさけねえ。

ほら見る。俺が何にもしてやれなかったから、今も震えた声で話す恭介は普段と変わらない笑顔の筈なのに　どこか歪んでいやがるんだ。……クソツタレ！！

「なあ、おかしいだろ？なんで苛々するんだ？ああ、確かに苛々はするだろうさ。怒りもするし、悲しい気分になる事もあるだろう。面白い事があれば、いつもの様な馬鹿げた笑顔で笑うとも。だけど、それはあくまで”夜没恭介”の話だ。何にも始まつちやいないだの恭介がそんな感情を抱くはずがないだろう？そんな事有り得ないんだ。なのに……なのになんで、夢の後で胸がざわつくんだよ！」

胸の内を明かすように、震える声は叫び声へと変わって。それに比例するように段々と恭介の仮面が剥がれていって。どこか可愛げのある親しみやすい笑顔が、恐らく大多数に好意的に受け入れられるであろう顔が、恭介の日常を司る顔が、ボロボロと音を立てるように崩れていって。

今にも泣きそうな、恭介を知ってる奴からすりゃあ、想像もつかねえような表情が現われる。

自然と、拳に力が入った。

……なんて顔してるんだよお前。今の今までんな顔したこと無かつただろうが。そんなに苦しかったのかよお前。いいぜ、だったら教えてやるよ。……だから、頼むからそんな顔すんなよ。

「……違う、違うんだ恭介。その感情は紛れもないお前自身の

」

「何が違うんだ！！この表情も！この感情も！全部お前からの貰いもんだ！！全部お前から教えてもらった通りに真似てきただけだ！！”夜没恭介”を始めて、やっと九翔正義の様に振る舞えるただの人形だ！！」

感情なんだ、と続けることが出来なかった。

……違っただよ恭介。ちゃんとあるんだ。お前にはちゃんと感情があるんだよ。確かに教えたさ。感情も、表情も。でもそれを真似ようと思っただのはお前の感情だろうが。そして、俺は間違ってもそんな表情教えてねえぞ。俺が教えたのは笑顔だけだろうが。なあ、恭介……。

否定する俺を、恭介は否定して。まるで駄々をこねるガキみてえに、喚くように叫ぶ。

「なあ、俺がただの恭介の時にお前と言いつた事があったか？え？無いだろうが！！当たり前だ！普段のお前との言い争いなんて全部茶番だ！！”夜没恭介”はただお前を真似ているだけの存在だろうが！だから普段、鏡映しの自分を見ているような気になって反発しあうんだろさ！！元気がない？お互いを心配？はっ、馬鹿馬鹿しい！一回でも”夜没恭介”を終わらせてしまえばそんな感情消えてなくなるっていうのに……ただの恭介が感じるものなんて何一つないっていうのに！！！」

「違っ！！！」

それに我慢できなくなって、叫んだ。

悲しかった。普段コイツと過ごす毎日が。馬鹿やって笑って、殴り合って喧嘩して、くっだらねえこと言い争う日常が。コイツにとって全部茶番だったと思うと、コイツにとって日常が全部偽者なんだと思うと……とても悲しかった。全然似てねえ俺の真似をして、コイツにとっては本気で俺を真似ていて……毎日を冷めた視線で過ごしているのかと思うと、とてもムカついた。

口を噤んで俺を睨む恭介に、慎重に、諭すように、言葉を選んで、

言い聞かせる。

「いいか、よく聞け恭介。始まりは確かに俺を真似たものだっただろうさ。けどな、ただの恭介が何も感じないなんて事は、絶対に、無い。おっと、口を開くんじゃねえぞ。黙って聞け。そもそも、お前が本当にお前が言う通りにただ俺を真似ているだけだつーんなら お前から見た俺はそんな表情をするのか？もしかしてお前、今自分が笑ってるとでも思ってたのか？ん？誰が見たって今のお前を”夜没恭介”だと思っ奴なんかいねえぞ。」

バツと、俺の言葉を聞いた恭介はすぐに顔に手を当てた。表情を確かめるように頬を撫でて、あり得ないものでも見るかのような目で俺を見た。

嘘だろ、オイ。とでも言いたげな目。……気付いてなかったのかよ、コイツ。でも気にしてる場合じゃねえ。逃げられる前に、一気に言っちまわねえと。

「……今まで何も言わなかったけどよ。今言っとかねえとお前が思い違いをしそうだから、はっきりと言わせてもらっぞ。ただの恭介が何も感じるものが無いつーんなら、何でお前は毎朝毎朝俺の部屋の壁に物投げてるんだ？まさか朝起きた瞬間から夜没恭介を始めますとかでも言ってるのか？ん？何で俺に夢の話をしたんだ？お前もさつき言っただろうが。怖いつてんなら”夜没恭介”を終わらせちまえば良いだけの話なんだ。なのに俺にその話をするってことは、”お前自身”が怖いつて感情を抱いていたからじゃねえのか？え？だいたい、なんでお前は”夜没恭介”を始めるんだ？いや、そもそもの話 お前に感情が無いつーんなら、なんでお前は俺を真似ようだなんて思っただよ。」

「……………」

考えれば考える程に、穴だらけなんだよお前の理屈は。そもそも始まりからおかしいんだ。自分には感情なんてものが無いから、俺を真似た”夜没恭介”って殻をかぶる。その前提から、間違ってたんだよ。

間違ってるのかもしんねえ。俺には感情があるから、感情が無い奴の事なんて分かりっこねえよ。けどよ、言い返せないっつーこたあ、そうなんだろ？本当はお前も分かっているんじゃないのか？恭介よお……。

認めたくねえのか、もうこれ以上聞きたくねえのか。頭を押さえながら違う、違うと呟く恭介を見て一瞬迷ったが、ここまで来たらもう全部思ってること言っちゃまった方がいいだろう。

「……お前言ったよな、怖いって。自分が自分じゃなくなるような気がするってよ。」

「止める!!」

恭介が叫ぶ……が、知るか。

「もし俺の想像している通りだとするんならよ、お前が怖がってるものっていうのは」

「止めるお!!」

ならば、あるいは、なんて言葉を続ける事が出来なかった。腹の底から搾り出したような叫び声と共に下から伸びてきた手によって、顔を鷲掴みにされちまったから。

大して力なんか籠っちゃいなかった。ただ、そうしてまでも俺の

言葉を止めたかったんだろう。

「頼むよ。……頼むからそれ以上言わないでくれ。」

それは、先程の様な否定ではなく懇願だった。

「……それ以上言われたら　きっと壊れてしまう。」

胸を抉られちまったみてえに、どうしようもなく辛そうな声で頼む恭介に、結局最後まで言葉を言えなかった。段々顔を掴む手に力が入ってきて。けど、足じゃなくて手が出てくる辺り、こいつはマジで切羽詰ってんだなと思うと、とか何とか。

止める、じゃねえ。頼む、とコイツは言った。壊れちまう、とそう言っただ。だったら　気付かせる事ぐらいは、できたんじやねえだろうか。……じゃあ、後はもうコイツ自身のの問題か。もう今日はここまでぐらいしか言えねえだろう。

もう何も言わねえよ、と顔を掴む恭介の腕をポンポンと叩く。腕に籠った力が抜けていくのを感じた。

「ごめん、正義。……今日はもう帰るよ。一人にさせてくれ。」

手を離してすぐに恭介は俺から背に向けたので、その顔を見るこゝとが出来なかった。

……仮面を剥がされたコイツは、今どんな顔をしているんだろうか。恭介の背中を見つめながら、そんなことを考える。

「大丈夫……大丈夫だから。明日にはちゃんと、いつもの”夜没恭介”になってるから……。」

言つて、恭介は歩き出す。
違う。ちげえよ恭介。そういう事じゃねえんだよ……。
でもそんな事を今口にするわけにもいかずに。

「恭介。」

声をかけると、恭介はピタリと立ち止まる。その背中からは、何も感じることが出来なくて。けど、助けてくれと、言っている様にも見えちまつて。

「後はお前の問題だから、俺はもう何も言わねえよ。ただ、これだけは頭に入れといてくれ。『何も無い所からは何も生まれない。』……親父の言葉だ。」

そんなアイツに、結局こんな言葉しか送つてやる事が出来なかった。恭介は答える事無く歩き出して、その姿が見えなくなるまで俺はアイツを見つめていた。……こりゃあ時間が掛かりそうだな。

やるせなくなつて夜空を仰ぐ。まるでカミサマに祈っているような気分だった。けどそれで良かった。恭介曰く、『カミサマなんて居ない。居たらしばき倒して地面に埋める。そして水でも注いでやれば、クソよりは役に立つだろうさ』。けどよ、良いじゃねえか。信じることは自由だ。嫌いであるつと、信じたつていい筈だ。でねえと、こんな時ぐらい祈らねえと、とてもじゃねえがやっていけねえ。

恭介は覚えていない。

『お前なんか大っ嫌いだ、この人殺し!!』

『ケケケ、そりゃ結構。それで良い。そう思ってるうちは、テメエはまともな人間様だよ。』

自分の、両親の事も。

『……なのに、何で、殺されなきゃならなかったんだろうね。』

『ハハハハハハハハハハ！そりゃお前の親父が悪い奴だからだろ!!』

『そう。そうか、そうだね。ハハハハハ』

何故、両親が死んだかも。

『じゃあねえから、俺がそのカンジョーを教えてやるよ!』

『……君が？馬鹿なの?』

『うつせえ！なんつっても俺はヒーローだからな、何でも出来るんだぜ!!』

『……じゃあ、頭脳明晰ってどんな感情?』

『ああ？そりゃあ……ズノーがメーセキなんだよ。』

『……頭脳明晰は感情じゃないよ。』

『ああ？……知ってんに決まってんだろ！馬鹿にして
じゃあまず笑顔から教えてやる。』 ああ、

『へえ……どんな顔？』

『今のお前の顔だよ。』

自分の、表情も、感情も。

『今のコーゲキ……誰だ！？』

『えー、夜こそは我が時間。日が没み、月が出でる頃に参上する。
あー、我は闇夜の王に恭順せぬ者。闇夜の王を嫌う者。この戦い、
介入しよう……？』

『訳わかんねえこと言ってるじゃねえよ！！』

『君が考えたんだろ！！』

『うるせえ！……まあいい、キサマ、何者だ！！』

『はあ……貴様に名乗る名前など持たん。邪魔をするなら容赦は
せんぞ。次は……』

『そこで決め台詞だよバカ!!』

『……さあ、夜没恭介を始めよう。』

『名前言っつてんじゃねえか!!』

『だから君が考えたんだろ!! 大体何なんだよこの恥ずかしい』

自分の、始まりの事も。自分の、根本を。

大事な過程だけ忘れて 結果しか覚えていない。

オーサムワンゴッド。頼むよ。どっかの誰かの名前もしらねえカミサマでいいからよ、あいつを助けてやってくれよ。

ヒーローでも、正義の味方でも何でもいいさ。どっかで建物ぶち壊して人殺してる暇があるんなら、苦しんでるあいつの背中を押しやってくれよ。

俺じゃ無理だった。そもそもあの時助けられなかった時点で、アイツにとつてのヒーローになってやれなかった時点で、俺にはもうどうする事も出来なかったんだ。だから

住宅街を照らす月が、次第に雲に覆われていく。まるで俺のそんな願いを馬鹿にするかのように。ああ、そうかい。それがテメエらの答えかい。分かったよ、もし会う事があれば、クソぶちまけさせて地獄に叩き落してやるからよ。……だからカミサマもヒーローも嫌いなんだ。

そんな、くつだらねえことでも考えないとこの憂鬱な気分飲み込まれちまいそうで。そうやって勝手に信じて勝手に裏切られたこ

とに、自分勝手に内心で罵倒しながら、俺も寮へと足を進めた。…
…あーあ、こりゃ明日は降りそうだな。とか何とか、そんな考えを
頭の片隅で思いつつ。

これは、そんな買い物帰り道での話。

……なっさけなかったよ。情けなさ過ぎて、気が狂いそうだった。
まあお前等からしてみれば、何だよそんな事が、くらいしか思わね
えだろうけどよ。けど、俺やアイツにとっては深刻だったんだよ。
深刻で、厄介な問題だった。

まあ、結局解決はしたよ。俺にとっちゃあ、解決しなかった方が
良かったと思っちゃうくらい最悪な形でだけどな。

……けど、それでも解決したんだ。過程はどうあれ、解決したん
だ。これから笑っていける筈だったんだよ。だっつーのに、そんな
矢先に『コレ』、だ。だからカミサマは嫌いなんだよ。

ああクソ、んな顔してんじゃねえよ。今更如何にかなることじゃねーんだ。それに……一応感謝してるんだぜ、お前等には。なんつっても、クソツタレなカミサマをぶち殺させてくれるんだからよ。

自称ヒーロー、自称カミサマ。上等じゃねえか。せいぜい無様にクソぶちまけない様にトイレの隅でガタガタ震えてやがれっつてやつだ。……まあそんなことしたところで、見逃すつもりはねえけどな。

テメエらの期待通り、クソぶちまけさせて地獄に叩き落してやるよ。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0108v/>

ただそれだけの話

2011年12月11日07時40分発行